Rotary District 2670/2680 RYLA

第40回

RYLA Seminar

青少年指導者養成セミナー報告書

テーマ

「 時(いま)を生きる 」

2018年3月22日～25日

主催

国際ロータリー第2670･2680地区

RYLA委員会

Rotary

目　次

Rotary District 2670/2680 RYLA

RYLAセミナーの方針・ねらい …… 3
スケジュール …… 3

■1日目■

●開校式
オリエンテーション
国際ロータリー第2680地区　ディーン　白井　良夫 …… DVD

ガバナー挨拶
国際ロータリー第2670地区ガバナー　柳澤　光秋 …… DVD
国際ロータリー第2680地区ガバナーエレクト　矢野　宗司 …… DVD

講演「ロータリーがRYLAに期待するもの」
国際ロータリー第2680地区危機管理委員長　黒田　建一 …… 6

●オープニングパーティ

●ロータリアンの夕べ
国際ロータリー第2670地区ガバナー　柳澤　光秋
国際ロータリー第2680地区ガバナーエレクト　矢野　宗司

■2日目■

講義1
組織で必須の人財=「不存在デメリット」　八百　伸弥　氏 …… 19
㈱網干造船所　経営企画室長　DVD
㈱みつヴィレッジ　代表取締役
兵庫電力㈱　代表取締役
㈱リバースヴィレッジ　代表取締役
㈱JAMPS　生産設備・技術開発支援部長

講義2
「自分が変わる。世界が変わる。」　吉川　雄介　氏 …… 26
DVD
NPO法人Colorbath 代表理事
e-Education　グローバル事業部統括(Managing Director)
IGCJapan.Inc CEO
Global Shapers Community(世界経済フォーラムダボス会議イニシアティブ)

●ロータリアンの夕べ
「JAPAN RYLA」カウンセラーミーティング

■3日目■

●フォーラム ……DVD
テーマ:「桃太郎が、人間達が倒せなかった鬼を、犬・猿・きじを使って倒した方法」

●カウンシルファイアー …… 32

■4日目■

●講義3
21世紀をどう生きるか
国際ロータリー第2680地区パストガバナー・RYLA顧問
安平　和彦 …… 33

●閉講式
閉講の挨拶
国際ロータリー第2670地区ガバナーエレクト　桑原　征一
国際ロータリー第2680地区ガバナー　瀧川　好庸

参加者感想文…… 47

受講生名簿…… 69

第40回RYLA委員会…… 71

■ 共に問い合おう！ ■ 課題を共有・追求しよう！

■ 共に成長しよう！ ■ 意識改革に挑戦！

RYLAセミナーのねらいは、受講生の皆さんに次のような5つの特色をあじわってもらうことにあります。

①高いレベルの講義と討論
②キャビンタイム（親睦とその熟成）
③自由と自律
④余島の自然
⑤カウンセラーシステム

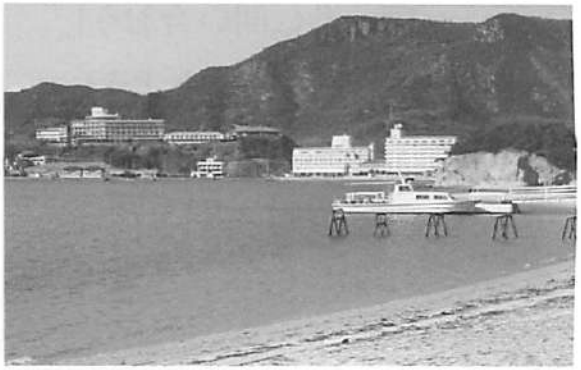
フォーラムなどを通して、学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

恵まれた自然の余島で、テーマに基づく講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
3月22日(木)								集合 14:00		開講式 オリエンテーション 講演 講師 黒田 建一氏 15:00		キャビンタイム 17:30		パーティー オープニング 18:30		キャビンタイム ロータリアンの夕べ 20:30
3月23日(金)		朝食 7:30		講義ー1 講師 八百 伸弥氏 9:30		昼食 11:30	講義ー2 講師 吉川 雄介氏 12:30			思索の時間 15:00	レクリエーション 16:00	夕食 18:00		バズセッション 19:00 ロータリアンの夕べ 19:30		
3月24日(土)		朝食 7:30		バズセッション 9:00		昼食 12:00	バズ集約 13:00	フォーラム 14:00				夕食 18:00		カウンシルファイア 19:00	キャビンタイム 20:30	
3月25日(日)		朝食 7:30		講義ー3 講師 安平 和彦氏 9:00		閉会式 感想文 記念植樹・撮影 10:40 昼食 12:00		解散								

おもいで

■ 余島上陸



■ 余島風景

■ 受付風景

■ 班編成

■ 開講式

2670地区G挨拶

2680地区GE挨拶

■ 班発表　A班

■ オープニング講義　黒田委員

■ 班発表　B班

■ 班発表　C班

■ 班発表　D班

■ オープニングパーティー

講演 ロータリーがRYLAに期待するもの

西宮イブニングRC
黒田 建一

1. はじめに

余島へようこそ。この様に、私達ロータリークラブのRYLAというセミナーに関わる者は、40回、40年間に亘ってこの挨拶をして参りました。

一方、皆さんは、大半の方が今回初めてRYLAというものと接せられたものと思います。RYLAの意味や、ロータリーについては、少しだけ説明がありましたが、今からもう少し詳しく話してゆきたいと思います。

ところで、このセミナーはこの3年間5月下旬に開催されていましたが、それ以前は3月下旬に開催されており、今年は元に戻ったことになります。2ヶ月早くなることで気候は全く変わり、5月の時は夏の様に暑い時もあれば、3月の場合、冬の様に寒い日もあります。今年はどうなるか分かりませんが、皆さんも体調には暮々も気を付けて下さい。

2. ロータリーとは

（1）ロータリーについて少しだけ説明がありました。もう一度繰り返しますと、ロータリーは、1905年2月23日アメリカのシカゴで、ポール・ハリスという弁護士とその友人達3人合わせて4人の青年達が集って会合を持ったことに始まりました。4人の青年達の収入や資産を私は知りませんが、必ずしもお金持ちではなかった様です。この集まりは、当初2週に1回であった様ですが、場所は会員の会社・事務所の持ち回りでした。ロータリー（歯車）という名称はそこから来ています。尤も暫くして、会場はホテルに固定会場を設けるようになりましたが。

（2）ところで、この4人、特にポール・ハリスは何故この様な集まりを作ろうと思ったのでしょうか。その前に、そもそも「クラブ」とはどの様なものか、少し触れておきたいと思います。

皆さんは、「クラブ」と聞いたとき何を思い浮かべるでしょうか。多くの人は学校時代のクラブ活動のクラブでしょうか。ロータリーの人はゴルフクラブかもしれません。クラブというものが何時頃出来たかはクラブの定義にもよるかもしれませんが、一応起源はイギリスであり、「club」という言葉は、「執着する、団結する」という意味のクリブ（cleave）という言葉から来ている様です。

クラブの様な団体は15世紀前後には有ったようですが、一般に広がったのは17世紀半ば頃のことで、当初は比較的開かれた集団が徐々に閉じられたものになっていった様です。

イギリス人が中心となって植民地開拓がされその後独立したアメリカ合衆国の場合も、盛んにクラブが結成されてゆきました。あるデータによりますと、1890年頃、1万人余りのある町に92種のクラブがあり、これは125人に1つの割合であったとのことです。この町では、その後1924年にはクラブ数が458となり、人口も増えたものの80人に1つの割合でクラブがあることと

なったそうです。

別の研究では、1950年頃と思われますが、1万7000人の町に800余りのクラブがあり、その密度は20人に1クラブに及んでいたとのことです。

この様にアメリカという国はクラブが盛んであり、「クラブが作った国」とも言われています。

しかし、アメリカの成り立ちを考える時、そうした現象は何ら不思議ではないとも言えるでしょう。1688年、アメリカ・プリマス植民地に入植したピューリタン達が設立した教会は、当時の在り方からすれば、まさに私的団体でした。

プロテスタントの内でもピューリタンなどを除けば、彼らが通う教会は王や領主の傘下の下に有り、教団単位の教会はありませんでした。その中にあってアメリカへ来たピューリタン達は、何のしがらみの無い私的結社としての教会を作りました。もともと宗教的圧迫から逃れて、アメリカへやって来たのですから、教会を守る為、又牧師養成の為神学大学を作りました（その1つがハーバード大学です。まず神学部でした）。

こうした結社が生活の基盤となっていたピューリタンを主とするアメリカ人にとって、クラブの存在は生活の一部になっていたのだと思われます。

この辺りは、世俗権力と宗教権力との力関係が問題となるところであり、特に日本の場合ヨーロッパとは随分違った関係にありましたから、私達にはわかりにくいところであるかもしれません。

また、日本でも古くから講や一揆、若者組などの団体がありましたが、これらは地縁、血縁と深く結びついており、個人の意思や判断による団体は江戸時代から明治時代にかけて展開されるに至った様です。

1905年のシカゴも教会やクラブの在り方は同じであったことでしょう。そうした中で、ポール・ハリスという中堅の弁護士が、3人の仲間とロータリークラブをシカゴで創ることとなりました。後にポール・ハリスはロータリークラブを作ったのは寂しかったからと言ったそうです。シカゴ出身ではないハリスには、親友と言える友達もおらず、定まった教会に属して通っていたわけでもありませんでした。当時のアメリカで定まった教会に属していないということが何を意味するのかについて、マックス・ウェーバーという20世紀を代表する社会学者が、1906年に新聞で発表した記事で1つのエピソードを紹介しています。ウェーバーがアメリカで会った医者の話として、医者が患者に病状を尋ねたところ、患者は症状には答えず、最初に、「私は、A街にあるB教会の者です。」と答えたということです。その教会はきっとその地区の有力者が通う教会であったのでしょう。その遣り取りの意味するところは、何よりも自分はB教会という教会に属する資格があると認められた者であり、経済的にも信用されていること、従って診療代はきちんと支払えますということを伝えたということになるわけです。このエピソードは、当時のアメリカの経済状況、つまり医者に代金を払えない人が多く居たであろうことを物語ると同時に、アメリカ社会における教会の位置付けも表してもいます。定まった教会に属していなかったハリスのステイタスは決して高くはなかったでしょうし、何よりも自分が何時行ってもよい場所が無いことも意味することになります。ハリスが寂しいと思い、自分達が自分達に似合ったクラブを作ろうとした気持ちを持ったことは、こうしたアメリカ社会の状況の中からも良く理解出来るところです。

（3）ロータリーは人の集まりであり、理念・目的をもった団体です。ロータリーはその目

的について**「意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある」**（RI定款第４条）としています。ここでいう「事業」は原文では「enterprise」とされており、企業心、冒険心、積極（自主）性という表現の方が相応しいかもしれません。その点は措くとしまして、「奉仕の理念」（「the ideal of service」、以前は「奉仕の理想」と訳されていました）について、RIの決議23－34「社会奉仕に関する1923年声明」では**「ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人の為に奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。」**と謳われています。**「利己的な欲求」**と**「義務＋義務に伴う他人のために奉仕したいという感情」**を調節する場としてのロータリーということになります。

（４）設立の経緯などはワークブックに書いてある通りです。1905年の創立時から暫くはアメリカ国内の主要都市に新クラブが設立され（初めの頃は１都市に１クラブでした。）、1910年から12年にかけ、カナダ、イギリス、アイルランドにも新クラブが設立されました。

その後、欧米以外にも拡がり、現在では全世界に36,000近いクラブがあり、ロータリアンの数は123万人に及ぶことになりました。

3. ロータリーの目的と奉仕

（１）ロータリーの目的（綱領）は設立当初から少しずつ変化があり、現在は次のとおりとなっています。

「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

第1 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；

第2 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；

第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；

第4 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて国際理解、親善、平和を推進すること」

この目的に対応する形でロータリーには①クラブ奉仕、②職業奉仕、③社会奉仕、④国際奉仕という４つの奉仕部門が定められ、その後⑤青少年奉仕が５つ目の奉仕部門に定められました。以下、各々の奉仕について少し説明しておきたいと思います。

（２）**「クラブ奉仕」**はクラブの機能を充実させる為に、クラブの内で会員が取るべき行動に関する部門です。

（３）２番目の**「職業奉仕」**については「事業および専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を実践していくという目的を持つものである。会員は、ロータリーの理念に従って自分自身を律し、事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる」とされています。

これが具体的には何を意味するものであるのか、これを理解することは中々難しいものがあります。ただ、この職業奉仕という考え方はロータリーに特有のものであることは強調しておきたいと思います。また、世の中にはロータリアンでない人で職

業奉仕に基づいて職務に就いている人は沢山居られますから、逆に難しく考える必要はないのかもしれません。また、職業奉仕が、例えば単に商品を寄贈したり、無償で職務提供するというもので終わるものではないことも知っておいて頂きたいと思います。

さき程紹介したマックス・ウェーバーは、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という書物でプロテスタント特にピューリタン達の宗教心と職業との関係について興味深い分析をしています。その分析は、ロータリーの職業奉仕を考えるに当っても大いに参考となるものですが、ここでは時間がありませんので紹介に留めておきます。

(4) 次は社会奉仕についてです。

① 1905年に新設されたロータリー(シカゴ)は当初奉仕という目的は持っておらず、「1. 本クラブ会員の事業上の利益の増大、2. 通常社交クラブに付随する親睦およびその他の特に必要と思われる事項の推進」という綱領(目的)を持っているだけでした。1. はビジネス推進、2. は親睦の推進を謳うものです。

1906年にトゥイードというロータリアンから入会を誘われた弁理士のドナルド(ドン)・カーターはその綱領を見て、「必要と思われる事項」と冷笑を浮かべゆっくりと一音節ずつ発音し、「まさに法律用語ですね。」と言いました。そして、彼はトゥイードに、こういう偏狭な動機のクラブに入る気はないと伝え、続けて、「こういうクラブは会員以外の人の役に立つようなことができれば、将来性があると思いますよ。何か市民に対する奉仕をするべきだと思います。」と付け加えました。するとトゥイードは、カーターに、入会して、今話したようなことを改正案として提案してはどうかと薦めました。カーターはこれを受け、その月のうちにロータリアンとなりました。トゥイードが次にカーターを訪れたとき、カーターはロータリー・クラブ定款改正案の手書き原稿をトゥイードに見せました。これを気に入ったトゥイードは自分の秘書にタイプさせ、間もなく開かれたクラブ例会で3番目の綱領として圧倒的多数で採択されました。

その内容は「3. シカゴ市の最大の利益を推進し、シカゴ市民としての誇りと忠誠心を市民の間に広めること」というものでした。

シカゴクラブ定款に1906年に加えられたカーターの構想は、その後のすべてのロータリー・クラブで採択され、永久にロータリー運動の焦点を変えることになりました。

② こうしてロータリーに奉仕という行動指針が定められたのですが、奉仕の方法は様々です。皆さんは奉仕しなさいと言われたら何をしますか。寄付?ボランティア?慈善活動?恐らくどれもが奉仕なのでしょう。

ロータリーの場合、まず、1907年に馬に死なれた説教師に馬の寄贈を行ないました。それから数週間後、ポール・ハリスは商工会議所の会合でシカゴの町中に公衆トイレが必要だという話が出ているのを聞き、早速その寄贈を企画しました。しかし、当時街中でのトイレは、女性はデパート、男性は居酒屋のトイレを利用し、その際なにがしかの買い物をすることが暗黙の了解とされていました。その為、売上げ減少を恐れたデパートや酒造業者が公衆トイレの設置に反対しましたが、それでもその反対を押し切って2年後の1909年に公衆トイレが設置されました。その後、ロータリーの社会奉仕活動は、大陸横断ハイウェイ・プロジェクト、災害発生時の援助、貧者・弱者に対する援助など様々な活動に広がり、かつてメインの目的であった会員間だ

けの互恵取引はその主役の座を奉仕に譲ることになりました。

③　災害援助については、我が国で最初のロータリークラブとして1921年４月１日に正式認証を受けた東京RCの有名なエピソードがあります。東京RCは大半が財界の有力者であり、多忙であったせいか当初はクラブとしての一体感は乏しかった様です。設立直後の1923年９月１日に東京大震災が発生しましたが、RIから９月４日にはRI会長名で激励電報が入り、翌日の９月５日には震災復興資金として25,000ドル（この頃の１ドルは少なくとも今の3,000円～5,000円位に当ると思われます）を贈るという連絡が入りました。当時は1921年～22年にかけてのワシントン軍縮会議や1922年の日本人の帰化禁止宣言などがあり、日米関係は決して好いものではありませんでした。そうした中にあってのロータリーの迅速な対応に、東京RCはロータリー活動の意義を見直し、それ迄不定期であった例会が定期的になるなど変化していったといいます。

（５）国際奉仕

ロータリーの奉仕は当初は社会奉仕として、主に地域内での活動がなされていました。しかし、奉仕の対象は自分達の住む周辺地域に留まることはなく、ロータリーの組織自体が国際化するにつれ外国の人々もその対象となってゆきました。

因みにロータリー加盟クラブのアメリカ以外の国数（地域を含む）が10を超えたのは1919年頃ですが、その10年後の1929年頃には58ケ国迄に増えており、当時アジア、アフリカの国が未だほとんどない（約10ケ国）ことを考えますと、海外への浸透はかなり早かったことが窺がえます。

なお、RIと略称される国際ロータリーは、全世界のロータリークラブのネットワークであり、1922年にそれ迄国際ロータリー連合会という名称であったものを、国際ロータリーに省略したものです（その理由はエンブレムに連合会の文字を入れると長過ぎるからというものだということです）。

ロータリーは1921年には「国際平和と親善」をロータリー綱領（目的）の一つに加え、国際奉仕が奉仕部門の１つとなるきっかけを作りました。

第一次大戦を終えたばかりの1921年頃は国際連盟の創設、軍縮会議、不戦条約の締結など戦争回避の為の様々な工夫がなされていました。その事は逆に所謂先進国間においてさえ国家間紛争が潜在し、時に顕在化するという不安定な時代であったことを物語っており、国際奉仕の意味は現代より一層大きな意義を有していたと言えるかもしれません。

（６）青少年奉仕

次に、ロータリーの第５奉仕とされている青少年奉仕活動の話に入りたいと思います。

青少年奉仕は、「指導力養成活動、社会奉仕プロジェクトおよび国際奉仕プロジェクトへの参加、世界平和と異文化の理解を深め育む交換プログラムを通じて、青少年ならびに若者によって、好ましい変化がもたらされることを認識するものである」とされています。

青少年奉仕のプログラムについてはワークブックにも簡単な説明があります。青少年奉仕に関する活動は元々社会奉仕や国際奉仕の部門の活動であったものですが、ロータリーは次世代を担う若い世代＝青少年に対する様々な育成活動の重要性を認識し、敢えて青少年奉仕という新しい奉仕部門を作りました。ワークブックに出ているインターアクト、ローターアクト、青少年交換（+新世代奉仕交換）、そしてRYLAはその活動内容がかぶることなく、様々なプログラムに参加できる様になっていま

す。例えば皆さんはこのセミナーを修了されればライラリアンとなりますが、それと同時にRYLA学友会の会員となり、それとは別にローターアクトに参加することも可能です。また、ロータリーは奨学金制度も設けていますから、その道も開かれています。今、RYLA学友会と言いましたが、これはRYLA修了生=ライラリアンの同窓会と考えて頂いてよいと思います。ただ、この同窓会は単にセミナーの思い出を語るという団体ではなく、RYLAセミナーで得たことによって自己鍛錬するばかりではなく、更に社会還元する様な活動を継続して行っていくことを目的としています。詳しいことは、また学友会の方から説明がありますから、それを聞いて下さい。

（7）五大奉仕の名称

これ迄に5つの奉仕についてお話しましたが、これらは同時にその名称がつけられたものではありません。年を追って増えてきたものであり、将来他の名称がつけられた奉仕が増えることも有り得ますし、反対に5が4に減ることも有り得ます。

ただ、どの様な名称となったとしても根本において持つ意味は変らないと思います。ですから○○奉仕という名称にとらわれることなく、その意味を理解して頂ければと思います。

（8）奉仕の意味 － 奉仕活動

ロータリーの奉仕はただお金や物を寄贈すれば足りるというものではありません。ロータリーの奉仕とは「奉仕活動」のことです。そのことは先にも触れました決議23－34という声明での「奉仕するものは行動しなければならない。従って、ロータリーとは単なる心構えのことをいうのではなく、また、ロータリーの哲学も単に主観的なものであってはならず、それを客観的な行動に表さなければならない。そして、ロータリアン個人もロータリー・クラブも、奉仕の理論を実践に移さなければならない。」とされていることからも明らかとなっています。このRYLAセミナーも運営や管理の大半を外注することも可能でしょうが、実際にはロータリアンが全て手仕事で行っています。

ロータリーの奉仕活動は、まず自身の行動ありきが大原則となっています。

それでも現実の奉仕活動で金銭出費が不可欠なことも確かです。

例えば、現在ロータリーが最も力を入れているプログラムの1つとしてポリオ撲滅を目的とするポリオプラス・プログラムがあります。これはポリオ（灰白髄炎）をポリオワクチンの投与によって全世界から無くそうとする活動ですが、その活動には毎年何億円かの費用が必要となります。ロータリーはその資金をロータリアンから募っていますが、世界中の大半のロータリークラブ、ロータリアンが直接そのプログラムを実践するわけではありません。

ロータリーは、それが必要であれば金銭や物の寄贈も行います。その管理主体としてロータリー財団という団体があり、ポリオプラスだけではなく、地区や各クラブの社会奉仕、国際奉仕活動（皆さんに分かり易い例で言えば奨学金など）の資金的援助を行っています。

4. RYLAとは

（1）さて、いよいよRYLA=Rotary Youth Leadership Awards=ロータリー青少年指導者養成セミナーの話に入りたいと思います。

RYLAの概要はワークブックに書かれています。1959年にオーストラリアのグレートバリアリーフで有名なクイーンズランド州のブリスベーンRCが青少年の為に一週間の会議を主催することになり、これに出席

する優秀な10代の青少年を、クイーンズランド州全体から集めました。この催し物が成功し高い評価を得ましたので、その方法はオーストラリア全体に、そして世界中に広がり、1971年にはRIはRYLAを正式にロータリー青少年プログラムとすることとしました。そうなったものの暫くは期待した程の盛り上がりはなかった様です。そうした中、先年亡くなられた今井鎮雄さんという私達の偉大な先達ロータリアンが、40年程前に、やはり私達の大先輩であり今もRYLA顧問をして頂いている伊丹ロータリークラブの深川純一パストガバナーなど何名かを仲間としてRYLAセミナーを実施することを考えられました。RYLAセミナーは今回も行っている様な40～50名単位の規模で行うこととなれば、単独クラブでの実施は難しく、地区規模で行うことになります。因みに地区についてはワークブックにも説明がありますが、本来ロータリーは組織的には個々のロータリークラブがRIに直接加盟をする形をとっています。しかし、世界中には約3万6,000のクラブがあり、日本だけでも約2,300のクラブがありますから、RIが直接個々のクラブと連絡を取ることは事実上不可能に近いことですから、70～80クラブ位の単位に区分けして、RIと個々のクラブの中継点となっているのが地区です。

話を戻しますが、40年程前は今の2670地区（四国全体）と2680地区（兵庫県）は1つの地区でしたから、今の様に2地区合同ではなく単独地区のプログラムとして発足しました。

第1回目は1979年でした。古い時代のセミナーのことについてはまたベテランのロータリアンの方々からお話があると思いますが、このセミナーは第1回目以降1回も中止することなく（あの阪神大震災の時も）開催されて来ました。何がこの継続をもたらしているのか、結論を先回りして言えば、セミナーを企画し実施しているロータリアンの思いに対し、受講生の皆さんが必ず積極的な反応をされているからであるということが言えると思います。

皆さんは、今は、一体これから何が始まるのだろうか、あと4日も長いなあ、最後迄持つかしらと思っておられるかもしれません。その皆さんに対し、ロータリー側が先立って皆さんに期待するものと題して話をしても中々分かりにくいかもしれませんが、多くのライラリアンがRYLA学友会に参加して積極的に活動していることは答えの1つであると思います。

（2）さて、RYLAという言葉についてもう少し話します。

始めのR=Rotary、これは概ね奉仕活動という言葉に置き換えて理解してもらっても良いと思います。始めにも申し上げました通り、奉仕という言葉は中々分かりにくい言葉でもあります。奉仕に近い言葉として「贈与」という言葉があります。贈与は深く考えないときは単に見返りを求めないような行為と考えられがちであると思います。しかし、「贈与論」と言う学問分野では、では返礼（反対贈与）の無い贈与は無いと考えられていることも事実です。一般に見返りを求めないことは讃えられるべきこととして考えられているかもしれません。しかし、贈与的行為の一環であるとされるボランティアについては次の様に言われています。『ボランティアを「一方的に他者に与える行為」と捉えること自体、ボランティアを知らない人による古くさい思い込みではないか。ボランティアは「これまでの自己犠牲的な「奉仕」、「献身」、「慈善」から、気楽に自然体で行う「自己発見」、「自己実現」、さらには「生きがい」そのものへと、まさにそのイメージも認識も変わりつつある」』、『確かに今のボランティア

論の多くは、「自己発見/実現」の他、「支え合い」「相互承認」「共にいること」などをボランティアの「本質」と規定し、「一方的な贈与」という表象を例外なく否定する。』

奉仕も奉仕活動も又同じ様に考えてもよいと思います。

つまり、贈与やボランティアがそうである様に、奉仕においても何らかの一方的な行動で終わるというものではなく、恐らくは、終わらない方が良いものと思います。

奉仕自体は、対価を求めるものではないことは確かですが、何らかの反応が生じない奉仕もまた、淋しいものであるかもしれません。それは感謝とかではなく、奉仕の受け手が奉仕した者と新たな関係性を持つに至るということであると思います。非常に抽象的ですが、その新たな関係性は、必ずしも積極的でなくとも、消極的、否定的なものであってもやむをえないと思います。

(3) 私達ロータリアンは、このRYLAセミナーを通じてロータリーの中心理念である奉仕(活動)を皆さんに認識し、理解してもらえればと思っています。奉仕活動はロータリアンだけがしているというものではありません。奉仕活動は誰にも出来ることですが、ロータリアンはその事を特に大事なものであると考えているということです。私達がRYLAセミナーを通じて皆さんに伝えたいことの中核はY・L即ちYouth Leadershipにあります。Leadership=指導者、指導力育成というと、何か自分が先頭に立って他の人を引っ張ってゆくノウハウの取得を目的化したもので、下手をするとお前は何様のつもりかと言われそうな気がすると思う人もいるかもしれません。

しかし、まず指導者については、ある人の集まりの中でその人が持つ何らかの意味のある力を他の多くの人が認める必要があるでしょう。例えば学校で数学や国語の教科書を勉強してテストで良い点を取って先生に褒められればそれで足るというものではないでしょう。なぜなら、その人が高い点をとっただけでは先生との関係は良くなるとしても、クラスメートとの関係や影響は一義的にプラスの方向へ行くとは限らず、直ちにクラス内のリーダーとして認識される保証はないからです。リーダーの力は、例えば何かの団体を多少時間をかけてでもまとめていく力であったり、それ迄何にも関わりのなかった人達が突然の災害にあったとき、瞬時に冷静な判断をして人を率いていく力であったり、様々です。前者の場合は、リーダー自身少しずつ勉強をしてゆけばある程度のリーダーシップの力は得られるでしょう。しかし、反面でその人の欠点も少しずつ現れてゆくかもしれませんから、時間のあることはその人の真のリーダーとしての力が試されることにもなります。後者の様に瞬間的な判断が求められるときは難しい。それは例えば地震の時、自身が慌てないという精神的能力に加え、その地震から発生するであろう危害を想定して行動するための知識的能力が必要であるだけでなく、狼狽している人々を一旦冷静にさせる為に例えば一喝するなどの身体的・物理的能力も必要となるからです。

尤も、この様な緊急時のリーダーを通常言われるリーダーシップにいうリーダーと言ってよいのかは少し問題があるかもしれません。もう少し継続的な集まり、もっと言えば何か目的を持った集まりの場合、そのリーダーの役割の考え方は本当に沢山あります。この点は余り詳しく話しませんが、少なくとも言えるのは、リーダーとはリーダーとして生まれてきているものではないということです。

皆さんはこれ迄生きてきた中で恐らく

様々なリーダーシップのイメージを持っておられると思います。「恐らく様々」であるというのは、皆さんはこれ迄それぞれ違った環境の中で、そしてここに集まっている他の受講生の皆さんとは違った人々の間で生活してきたわけですから、様々な違ったイメージがあるだろうということです。全く当り前のことなのですが、このことは皆さんがこれから先、生きてゆく中でも又、これ迄に経験してこなかった様々な人々や集団の中で生活してゆくことによって、それ迄とは違ったリーダーシップをイメージすることになると思います。今日のセミナーもその一つの機会となることでしょう。

いずれにしましても、前者の様な場合にせよ、後者の様な場合にせよ、私達はまず自分が自分で考える力を持ち、かつ、自分の考えを説得的に伝える力がなければなりません。こうした力は、いずれは他の人にチェックされることもあるでしょうが、当面は自分1人で鍛え、習得するより他ありません。ですから、このセミナーは他の人をどうのこうのしようとすることを目的とするものではなく、取り敢えず自分の為にあるものと考えてもらえば良いと思います。しかし、このセミナーは自己啓発セミナーとは違います。私達はこのセミナーで皆さんに何か直接なあるいは具体的な目的を達成してもらいたいわけではありません。むしろグループ・班の中の他の人達との関係の中での自分は何なのかを知って欲しいと思います。長い人生の環として考えてもらってよいのですが、勿論何かが得られるのであればそれに越したことはありません。

(4) リーダーシップの話はこれ位とし、次にセミナーの中身についてお話をしたいと思います。このセミナーのプログラムについてはワークブックに書かれています。時間配分から講義とバズセッション、フォーラム、もう1つ思索の時間が、中心となっていることは予想できることと思います。講義については私自身その内容を知りませんから説明することは出来ません。講義はありのままに聴いて下さい。ただ、今回のテーマが皆さんにとってこれ迄に興味があったかどうかは分かりません。そうであるとしても、少なくとも世の中には様々なテーマがあり、どの分野においても多くの人が本気で勉強し、研究していることを知って頂きたいし、物事を本気で行っている人達に対して敬意をもって接して頂きたいと思います。但し、だからといって講義の結果をう飲みにして無条件で高く評価すべきであると言っているわけではありません。自分で理解出来る範囲で評価してみて下さい。

(5) 思索の時間はこのセミナー特有のものです。皆さん普段的1人になることはあっても大概の時はスマホが側にあったりして、本当の意味で1人で居ることは案外少ないと思います。

思索するとはどういうことでしょうか。体で喩えてみます。人は何故服を着るのか、お風呂に入ると何故気持が良いのか、その理由として、服やお湯が人の体と外界との境目をはっきりと感じさせてくれるからだという考え方があります。人は裸のままでいると自分と外界との境目が分からず、自分というものがはっきり感じられない為不安になるらしいのです。この点は考えるという作業にも共通する所がある様に思います。人には脳があり、脳で考えます。考えなくても脳はあります。スマホを使う時も寝ている時も脳は動いていますが、それは思索とは違うものと思われます。例えば、自分とは何かと考えることにより、「裸のままの自分（脳があるだけの自分）」から、「自分が居ることを知る自分」へと転ずることが出来るのだと思います。これが思索の1つの意味であると思います。

この時間はそうした時間です。自分が1

人で考えるだけという貴重な経験を楽しんで下さい。

（6）もう一つの大きなプログラムであるバズセッションとフォーラムについてはいずれ詳しく説明がありますから、これもその内容の説明はしません。ただ一つだけ知っておいて頂ければ参考になるのではないかということについてお話をします。

セッションとは英和辞典で調べますと、まず「議会を開会していること」、「裁判を開廷していること」とあり、次いで「授業」などの訳が出てきます。そして、米国訳として、「特に集団活動の期間（特につらいめ、つらい経験）」ともあります。ただ、このセミナーではむしろ一定時間内での討論という様な意味で用いられていると考えてもらったら良いと思います。こうした討論では、5～10人が自分の考えを述べることになるのですが、時間に限りがありますから、漫然と話していればよいというものではありません。それぞれの人は、これ迄に得た人生経験の質・量も異なり、そもそも知っている言葉＝語彙力も違います。そうした人たちが話し合いをする時、少なくとも何らかのルールが必要であるという考え方があります。そのルールを一通り理解する為にはかなりの量の前提知識が必要となりますし、私自身はとても他の人に向けてそのお話を出来る状態ではありませんが、ただ、その入り口の第一歩の辺りはどのような討論の場合にも妥当するものであると思いますので、少し触れておきます。

討論をしている間に何について話をしているのか分からなくなったり、そもそも全く話がかみ合わなかったりすることがあります。そうした事態を防ぐ為の前提として、**①自己矛盾するような話し方をしてはならない、②一つの言葉をその時その時で違った意味で話してはならない、③ある言葉が指す意味は誰が使うにせよ基本的に同じであること**、といったルールが守られるべきである、ということです。もしそれが守られていなければ、討論の内容を共有化して話を進めてゆくことが難しくなることは容易に理解出来ると思います。

誰もが知っているようなルールですが、始めからこのルールを意識しながら話をするのは案外難しく、却って自由な話が出来なくなるかもしれませんから、取り敢えずはそうしたルールを意識せずに話をしても一向に構わないと思います。ただ、討論が行き詰まったときには自分でルール違反に気付くかもしれませんし、人に指摘されるかもしれません。少しずつ慣れてゆけば良いと思います。

（7）バズセッションに与えられるテーマは、普段皆さんが考えたことが無い様なものであると思います。セッションによって何らかの結論を出すことになりますし、フォーラムでは何故そう考えたのかを伝える必要があります。唯一の正解があるわけではありません（唯一の正解があると思われがちな数学や物理の世界でも500年、1000年単位で見れば唯一と言えるのか疑問があるのかもしれません。）。何が答えと言えるのかがよく分からない問いが出るわけですが、そうした問題の例を少しばかり考えてみたいと思います。

私が開講の日にお話をする様になって今回は3回目です。初めての時は、重い病気となった妻を助ける為に高価な薬が必要である貧乏な夫は、その薬を盗んででも妻を助けるべきか、例え妻が死ぬこととなっても盗みはすべきではないか、という例を挙げました。去年は、有名な路面電車問題（トロリー問題＝トロリオロジー、トロッコ問題とも言われます）の例を挙げました。今年はオックスフォード大学の入試にもで出たという**「もし全能の神がいるとしたら、彼は自身が持ち上げられない石**

を造ることができるでしょうか?」という例を挙げてみたいと思います。これも古くから神学者や哲学者が考えて来たもので「石の逆説」と言われる問題です。

この問題を取り上げた本の著者は「実はこれは撞着表現を使っているだけで、逆説ではない。全能者によって動かせない石など端から有り得ないのだから。四角い円とか、既婚の独身男性とか、日の照っている夜とか、雨の多い砂漠などと同じだ。この質問は最初から意味がないのである。全能の神は自身で動かせない石を造ることはできない、といってもそれは彼が全能でないという意味ではない。単に論理が間違っているのだ。」という考え方を紹介しています。

また、「神学者たちの多くは神は人の論理を超えた存在であると言うだろう。となると、「神は自身で持ち上げられない石を造ることができるでしょうか?」への答えは「はい、できます、そして持ち上げることもできます」となる。神の力は人知を超える奇跡であると言われる。そのような力をふるって神は宇宙を無から想像したのであり、自らが望めば2+2を5にすることもできる。」という考え方も紹介しています。神の問題は神は実存するかという問いから始まり難問が多い様です。もし人が神にこの様な問いを発したら、神はどう答えるでしょうか。神は自分が作ってやった人間のお前達の質問に答える必要は無いとでも言うでしょうか。それとも一緒に問題を考えてくれるでしょうか。この問題は難しいのでこれ以上は踏み込まず今年は他の例も挙げてみます。20世紀前半に活躍した現代音楽（コンテンポラリー）の産みの親と言えるアーノルド・シェーンベルクという作曲家の次の発言です。「本に音読が不要なように、音楽にも演奏は不要だ。というのも、音楽の筋道は譜面に余すところなく表されているのだから。そして、どうしようもなく偉そうにしてはいても、演奏家はおよそ不要な存在なのだ。十分に楽譜が読めない気の毒な聴き手に楽曲をわからせるため、演奏してみせる場合を除いて。」この発言は音楽における演奏の意味を追究した本で引用されているものです。この発言に関する意見を述べることはさ程難しくないかもしれません。皆さんの多くは音楽が好きでしょうし、音になった音楽をよく聴いておられると思います。しかし、また多くの方は「十分に楽譜が読めない気の毒な聴き手」でもあると思いますから、シェーンベルクと共に、演奏は必要だと答えることになるでしょう。しかし、音楽が元々音を伴なった時間芸術であるとしたとき、「音」が物理的にではなく、頭の中で鳴る（と言ってよいのか疑問ですが）ことをもって音楽と言えるのか、という疑問も出るでしょう。いずれにしても、シェーンベルクの発言は、音楽学者が取り上げる程に意表をつくものであり、音楽における音の捉え方1つをとって様々であると思い、紹介してみました。

（8）価値判断が伴う問題について話し合うとき、例えば「結局は価値観の問題だから討論しても意味はないという考え方」が出そうです。

この考え方は、それ自体が1つの価値判断であって、「『結局は、価値観の問題である』という価値観」の表出である、というジレンマを抱えることになります。従って、その考え方自体が正しいのか、という問題を持ち込むことになり、物分かりが良さそうな答えが却って問題を複雑にしています。

最近、クリティカル・シンキング=批判的思考という言葉に接することが増えているようです。批判的とはいっても非難やあらさがしをすることを目的とするものではな

く、様々な情報や意見をうのみにすることなくより慎重に熟慮することを意味するものです。言われる迄もなく当然のことだと思われるかもしれませんが、漫然と慎重に熟慮するといっても、どの様にしたらそうなるのかを問われれば説明は案外難しいかもしれません。そこで、その方法論を整理しているのがクリティカル・シンキングだということになります。

例えば、「議論の分析や組み立てをする場合は論理的であること」、「意思決定をする場合は合理的であること」が求められるといった辺りが出発点となるでしょう。

皆さんは明日からバズ・セッションとフォーラムの為に長い時間をかけて考え、話をすることになります。これ迄私が話して来た様なことはかなりの程度迄は無意識のうちに行っていることであると思いますが、自分の考えや討論を深める為には、今直ぐには無理であるとしても、少しずつより慎重な考え方への道を探って頂きたいと思います。

(9) さて、これ迄はセッションやフォーラムについてお話しして来ましたが、これからはもう少し広くセミナー全体について、私達が皆さんに考えて欲しいこと、心掛けて欲しいことをお話ししたいと思います。

この地区のRYLAセミナーは全国的に観ても多くの特長をもったセミナーであると言われています。例えば①期間が3泊4日と比較的長いこと、②場所が余島という離島であること、③参加者が成人に限られていること（RI基準では未成年者の参加も可能です）、④プログラムが多様であること、などが特長点として挙げられます。こうした特長のあるプログラムは、今井鎮雄先生や深川純一先生が文字通り熟考して編み上げたものであり、微細な点はともかくとして、ほとんど内容を変える必要の無いものとなっています。

例えば、3泊4日という期間は、初めて経験する人には長く感じるかもしれません。しかし、終わってみればアットいう間の3泊4日となることでしょう。それは多彩なプログラムが無駄な時間を作ることなく一つの流れとしてあるからです。皆さんにはまずそのことを体験して頂きたいと思います。

次いで、離島であること。ここには少なくともセミナーの間観光客はいません。セミナーに集中できる環境が保証されています。

3番目に受講者が成人に限定されていること。これは第1回目から守られています。今のロータリーは未成年者が参加するプログラムについては危機管理の面で厳しいルールを定めています。しかし、このセミナーが始まった1979年頃は、細心の注意を払うことは当然であるとしても、明文化した規則をもってルールを定めていたわけではありませんでした。それでも受講生を成人に限った理由は、高度のレベルの講義を受けたり、セッション、フォーラムをする能力は少なくとも大学生レベル以上の年齢が期待されたということにもあるでしょう。しかし、それ以上に、セミナー中の生活全般について受講者の自主性に委せるとすれば、それは権利としてだけではなく義務をも伴うものですから、成人という年齢の区切りを考えることが必要であったと考えられます。多少堅苦しく言えばこの様な事なのですが、例えば、このセミナーでは飲酒も禁じられていません（勿論推奨しているわけでもありません）。一方で講義、セッション、フォーラムという緊張と忍耐を要する作業があり、一方で飲酒も徹夜も可ということになっていますから、そこでは受講生各々が自分を律しなければなりませんし、身体的、精神的容量の異なる他の受講生を思い遣るという態度も必要となります。

このセミナーは無礼講ではありませんから、特別の縛りがないだけに自己コントロールが必要であり、それを実行することは未成年では難しいかもしれません。成人の日に大人の責任ということがよく言われますが、このセミナーの年齢制限もその趣旨を含んでいるものと考えて下さい。

(10) 若気の至りということもあるかもしれませんが、私達は皆さんの行動について自主裁量権を最大限に認めます。その限度を見極める力を持つこともリーダーとなりうる資格要件の1つと言ってよいと思われます。とはいえ、毎回私達の方から皆さんにお願いすることはあります。主だったことはディーンやYMCAの方から説明があります。その中にあって時間を守る事、これは繰り返しお伝えしなければならないと思います。何かの集まりがあるとき、定刻迄に指定された場所に着き、その場で行われることに対応できる準備が終わっていることが最低限のマナーであることは、誰もが知っていることであると思います。集まりに参加する以上、その中での時間は自分だけのものではなく、参加している人皆と共有している時間であるわけですから、自分の都合だけで時間をコントロールしてはならないことは取り敢えず誰にも分かる事でしょう。

また、講義の場合は、講義をする先生に敬意を表する意味でも時間を守ることは最低限のマナーであることを、私達は社会的ルールとして知っています。「時間を守る」、というルールは少なくとも日本ではほぼ全員が共有していることであり、これを順守することのプライオリティーは非常に高いと思われます。

(11) このセミナーで守られるべきルールは他にも多くありますが、言われなければ分からないルールもあるかもしれません。ルールと言っても、何処でも守らなければならないルールから、その場の特別な理由から守らなければならないルール迄多種多様ですがそうしたことを知ってゆくことも大切なことであると思います。

5. まとめ

私達はこのセミナーで、皆さんに必ず何か特定のもの、具体的なものを持ち帰って欲しいとは申し上げません。皆さんが地元へ帰って、自分が考え、人と話し、働く時の何か有効なきっかけが出来たのであれば、それで十分であると思っています。全く漠然とした言い方ですし、未だ何も始まっていないのですから、よく理解できないかもしれませんが、取り敢えず3泊4日を一生懸命経験して下さい。その経験の内には講義やセッション、フォーラムだけではなく、それ以外の人との交わり、そしてこの余島の自然も入ることになるでしょう。

私達ロータリーは過去に39回に亘って2000人近くの多くのRYLA受講生－修了すればライラリアンそしてRYLA学友－と接触して来たことになるのですが、今年はどのような反応があるか楽しみにしています。

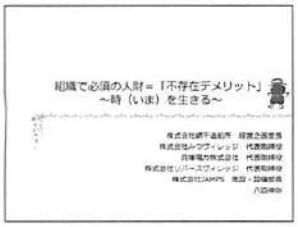
以上

講義 1

組織で必須の人財＝「不存在デメリット」

八百 伸弥

●略歴
大阪大学基礎工学部卒
大阪大学大学院
　基礎工学研究科修了　工学修士（ロボット工学）
　コミュニケーション・デザイン修了
株式会社船井総合研究所入社（2014年3月退職）
株式会社網干造船所入社、ロボット事業部設立（現経営企画室長）
株式会社みつヴィレッジ創業（現代表取締役）
兵庫電力株式会社創業（現代表取締役）
株式会社リバースヴィレッジ創業（現代表取締役）
株式会社JMAPS設立（現生産設備・技術開発支援部長）

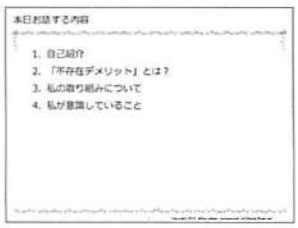


1

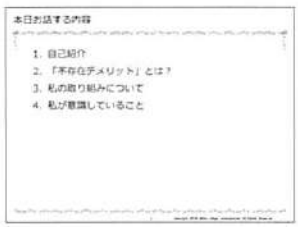
4

7

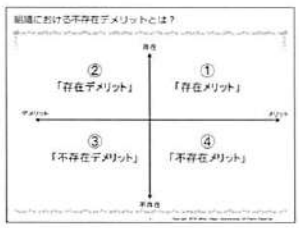
10



2

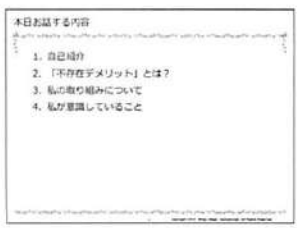


5

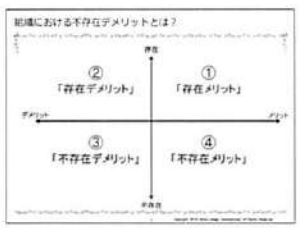


8

11



3



6

9

12

組織における不存在デメリットとは？

③「不存在デメリット」
必要不可欠な人間で、抜けられるとみんなが困る。誰もあなたの仕事を引き継げない

①「存在メリット」
実績を積み上げ、周りからの信頼を得ている。仕事が楽しい

②「存在デメリット」
成長性はあるが、実績はなく、まだ実力不足の状態（新入社員など）

④「不存在メリット」
あなたは組織にとってのお荷物で、代替可能な消耗品以下

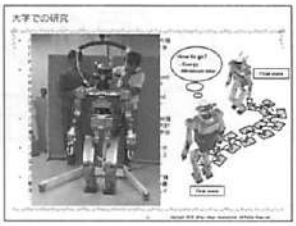
13

自己紹介

1986年12月　兵庫県たつの市御津町苅屋生まれ
2005年3月　兵庫県立姫路西高等学校　卒業
2009年3月　大阪大学基礎工学部システム科学科　卒業
2011年3月　大阪大学大学院基礎工学研究科　修了
　コミュニケーション・デザイン　修了
2011年4月　株式会社船井総合研究所　入社　～2014年3月
2014年5月　株式会社納千造船所　入社　現経営企画室長
2014年10月　株式会社みつびィレッジ　設立　代表取締役
2015年10月　兵庫電力株式会社　設立　代表取締役
2016年10月　株式会社リバースヴィレッジ　設立　代表取締役
2017年1月　株式会社JAMPS　創業メンバー　現設備・施設部長

19

大学での研究



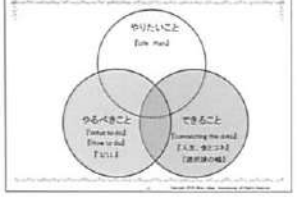
25

地域活性化への興味

八百竜治
- 株式会社納千造船所　創業
- 私の曾祖父
- 御津町長（24年）
  - 成山新田（57ha）の干拓事業
  - 新舞子（現戸内海国立公園）・緑部山県林観光事業
  - 兵庫県の町村会長
  - 地元の知らない人から聞かされる曾祖父の話
  - それが誇だった中学時代
  - 期待されることの有難さ

31

不存在デメリットになるために



14

小学校～高校

小学校　サッカー部　将来の夢「サッカー選手」
　児童会長
中学校　サッカー部　週休　だけど　本気
　生徒会長
　勉強　学年1～3位
　ゲーム　スーパーロボット大戦に興味を持つ
高校　サッカー部　週休　だけど　本気
　勉強　理系　学年50位くらい
　　数学・物理　学年10位以内
　　国語　学年　後ろから10位以内
「ロボット」の単語に興味があった

20

大学での活動

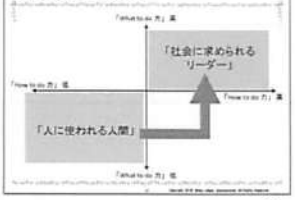
26

就職活動

トヨタは、研究室から1名いける（？）
⇒ 最後の手段にしよう
父親の経営する（3代目）会社
　建設、製造業（鉄工）、売上1～2億
⇒ 今戻ってもできることはない
ロボットに関わる仕事がしたい
⇒ ロボットはあくまで手段
地域活性化に興味
⇒ 地域活性化ってなんだ？？

32

不存在デメリットになるために



15

小学校～高校

21

大学院でのきっかけ

全力で研究し、研究成果を上げ、学会等にて発表
世界のロボット研究者と話しをする
こいつらには勝てないな
ロボット研究者の偏食の狭さ
他の研究科の大学院生との対話
地球温暖化について考える市民会議のコーディネート
舞面市との地域活性化プロジェクト
ロボット技術の可能性
日本らしいロボットに対する考え方
「人間とロボットの共存」

27

就職活動

なりたい職業　市長
⇒ 市長に話を聞いてみよう！
　舞面市長、横須賀市長と面談
⇒ 市長もあくまで手段
⇒ 地域活性化とは何かを自分で定義する
⇒ 外からヒト・モノ・カネが入り
　内でヒト・モノ・カネが回る
⇒ 「経済」のことをもっと知る必要がある
⇒ コンサル会社　しかも　中小企業中心

33

不存在デメリットになるために

16

小学校～高校

小学校　サッカー部　将来の夢「サッカー選手」
　児童会長
中学校　サッカー部　週休　だけど　本気
　生徒会長
　勉強　学年1～3位
　ゲーム　スーパーロボット大戦に興味を持つ
高校　サッカー部　週休　だけど　本気
　勉強　理系　学年50位くらい
　　数学・物理　学年10位以内
　　国語　学年　後ろから10位以内
「ロボット」の単語に興味があった

22

ワーク

雨が降ったらどう思う？

多くあった意見

面白い！と思った意見

28

自己紹介

1986年12月　兵庫県たつの市御津町苅屋生まれ
2005年3月　兵庫県立姫路西高等学校　卒業
2009年3月　大阪大学基礎工学部システム科学科　卒業
2011年3月　大阪大学大学院基礎工学研究科　修了
　コミュニケーション・デザイン　修了
2011年4月　株式会社船井総合研究所　入社　～2014年3月
2014年5月　株式会社納千造船所　入社　現経営企画室長
2014年10月　株式会社みつびィレッジ　設立　代表取締役
2015年10月　兵庫電力株式会社　設立　代表取締役
2016年10月　株式会社リバースヴィレッジ　設立　代表取締役
2017年1月　株式会社JAMPS　創業メンバー　現設備・施設部長

34

本日お話する内容

1. 自己紹介
2. 「不存在デメリット」とは？
3. 私の取り組みについて
4. 私が意識していること

17

自己紹介

1986年12月　兵庫県たつの市御津町苅屋生まれ
2005年3月　兵庫県立姫路西高等学校　卒業
2009年3月　大阪大学基礎工学部システム科学科　卒業
2011年3月　大阪大学大学院基礎工学研究科　修了
　コミュニケーション・デザイン　修了
2011年4月　株式会社船井総合研究所　入社　～2014年3月
2014年5月　株式会社納千造船所　入社　現経営企画室長
2014年10月　株式会社みつびィレッジ　設立　代表取締役
2015年10月　兵庫電力株式会社　設立　代表取締役
2016年10月　株式会社リバースヴィレッジ　設立　代表取締役
2017年1月　株式会社JAMPS　創業メンバー　現設備・施設部長

23

就職活動

トヨタは、研究室から1名いける（？）
父親の経営する（3代目）会社
　建設
　製造業（鉄工）　10年で1人前になる職人は
　売上1～2億
ロボットに関わる仕事がしたい
地域活性化に興味
なりたい職業　市長

29

船井総研での活動

1年目　太陽光発電販売ビジネス

35

自己紹介

1986年12月　兵庫県たつの市御津町苅屋生まれ
2005年3月　兵庫県立姫路西高等学校　卒業
2009年3月　大阪大学基礎工学部システム科学科　卒業
2011年3月　大阪大学大学院基礎工学研究科　修了
　コミュニケーション・デザイン　修了
2011年4月　株式会社船井総合研究所　入社　～2014年3月
2014年5月　株式会社納千造船所　入社　現経営企画室長
2014年10月　株式会社みつびィレッジ　設立　代表取締役
2015年10月　兵庫電力株式会社　設立　代表取締役
2016年10月　株式会社リバースヴィレッジ　設立　代表取締役
2017年1月　株式会社JAMPS　創業メンバー　現設備・施設部長

18

大学での研究

24

地域活性化への興味

30

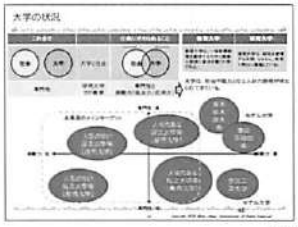
船井総研での活動

2年目　食品ビジネス

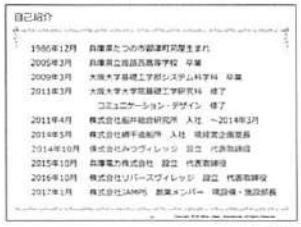
36

37

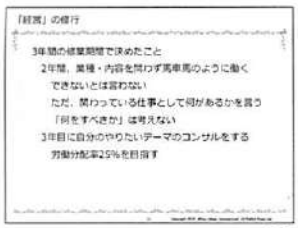
43



49



55

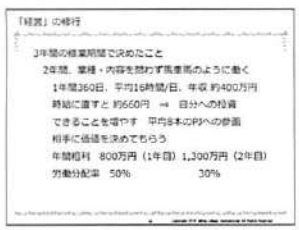


38

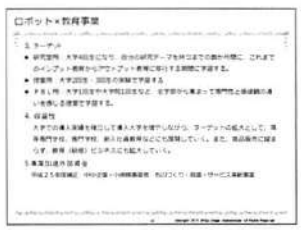
44

50

56



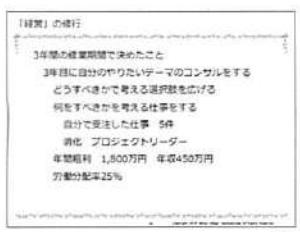
39



45

51

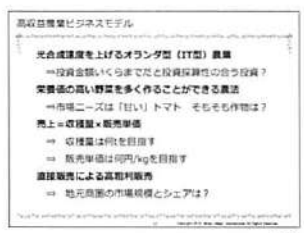
57



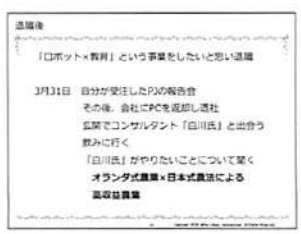
40

46

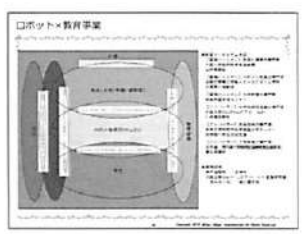
52



58

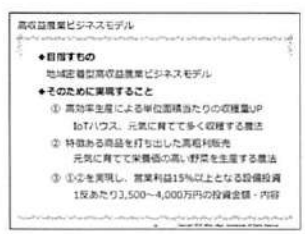


41



47

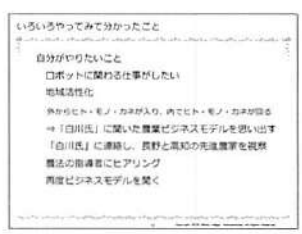
53



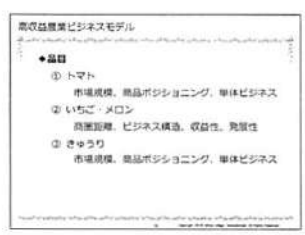
59

42

48



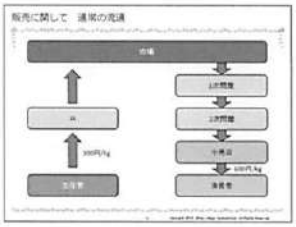
54



60

61

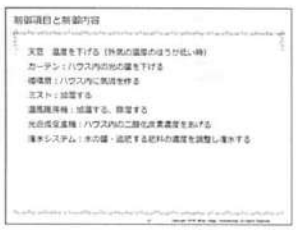
67



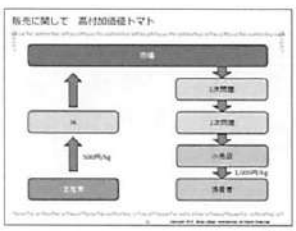
73

79

62



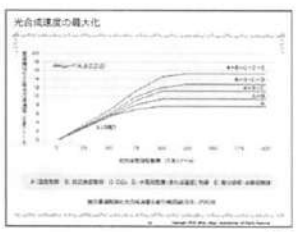
68



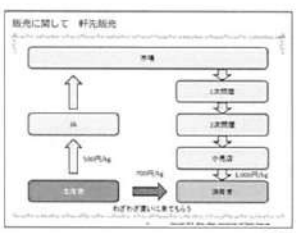
74

80

63



69

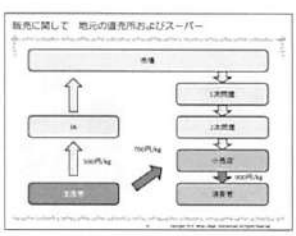


75

81

64

70

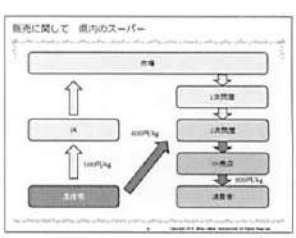


76

82

65

71



77

83

66

72

78

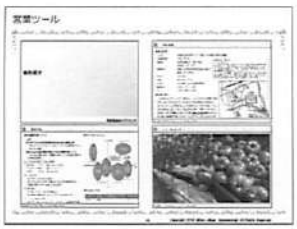
84

85

91

97

103



86

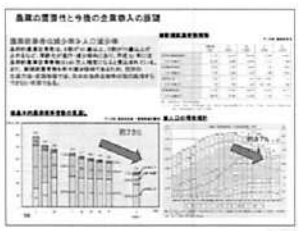
92

98

104

87

93

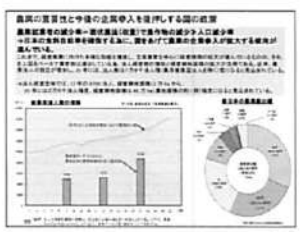


99

105

88

94

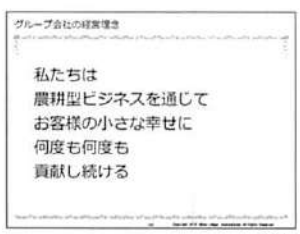


100

106

89

95

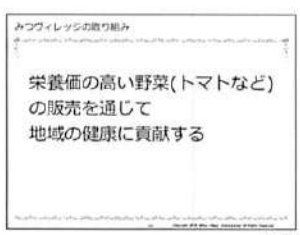


101

107

90

96



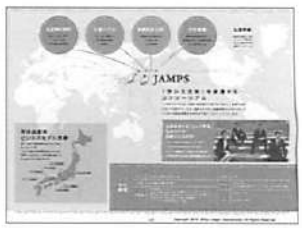
102

108

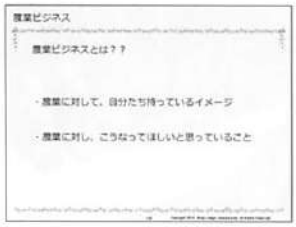
109

115

121



127

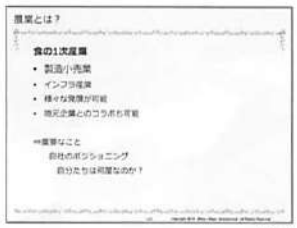


110

116

122

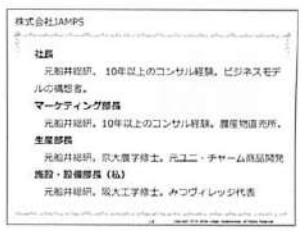
128



111

117

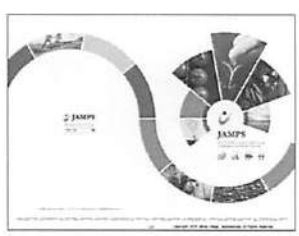
123



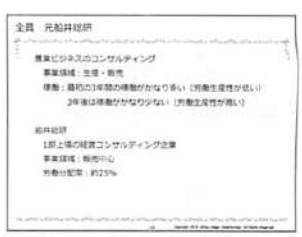
129

112

118



124

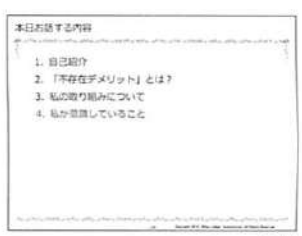


130

113

119

125



131

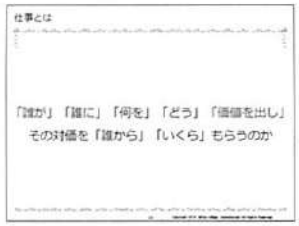
114

120

126

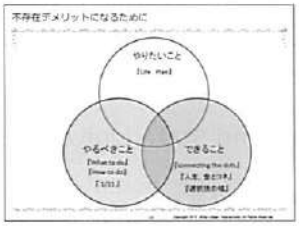
132

133

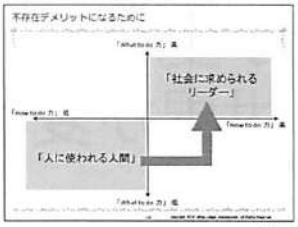


134

135



136



137

138

講　義（2日目）

講義 2

自分が変わる。
世界が変わる。

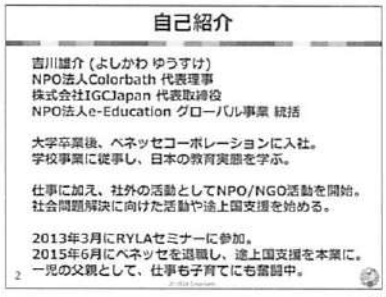
第35回RYLA修了生
吉川 雄介

●略歴
1985年生まれ
早稲田大学国際教養学部、米国Portland State Universityにて社会学を専攻
NPO法人Colorbath代表理事
株式会社IGC Japan代表取締役社長CEO
NPO法人e-Education海外事業統括
新卒でベネッセコーポレーションに入社
世界経済フォーラム（ダボス会議）による世界の若手リーダーGlobal Shapers Community 日本代表

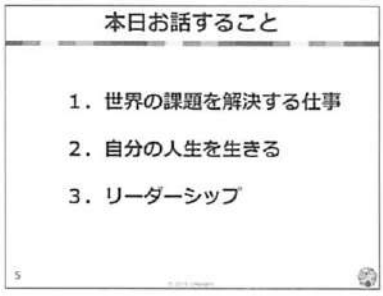
1

4

7



2



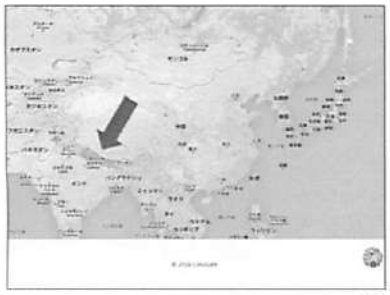
5

8

3

6

9



10

15

20

11

16

21

12

17

22

13

18

23

14

19

24

25

25

そもそも…

30

35

26

31

36

世界を知る

世界の人口　70億

アジアの人口　45億

65%

27

27

怪我
入院
手術
宣告

32

JICA年次報告書にて「優良事例」として紹介

37

いまできることは何か

28

訪れたスラム。見えた世界。

33

33

退職する前

家族はどうするの？
将来ちゃんと考えているのか？

38

路上で出会った
3歳の女の子

29

人のために生きよう
全力で生きよう

34

退職後

何でも助けるから言ってね！
一緒に頑張ろう！

39

自分で決めること

40

できることはたくさんある

45

50

Connecting Dots.

-出会いが世界を広げる-

41

来日するネパール人は急増

2000年に比べて

15倍

約7万人
増加率は第１位

46

51

42

47

52

43

父：小学校5年まで
母：小学校に行ったことがない
→13歳から首都カトマンズで出稼ぎ
　月収250円
→30歳から中東へ出稼ぎ
　月収4万円
→35歳から日本へ

娘：私立学校へ。苦労させたくない。

48

途上国と日本をつなぎ、未来に向かって芽を伸ばす。

IGC JAPAN

53

53

豊かに過ごし楽しむ子どもたち

44

44

1年のうち9ヶ月間は乾季
海外への出稼ぎは300万人以上

49

大切にしてほしいこと

54

54

55

58

61

56

59

57

60

レクリエーション（2日目）

カウンシルファイヤー（3日目）

講義3

21世紀をどう生きるか

パストガバナー（2680地区）
RYLA顧問　**安平　和彦** 氏

●略歴
昭和44年京都大学法学部卒
2002-03年度　RI2680地区ガバナー
2007-10年　規定審議会代表議員
2007-08年　国際ロータリー研修リーダー
2010年9月～　一般社団法人ロータリーの友　事務所代表理事・ロータリーの友委員会委員長・現在特別顧問

みなさん、おはようございます。きっと昨夜は夜を徹して語り合われた方もいらっしゃると思いますが、皆さん意外にお元気ですね？今日の最終講義は、「21世紀をどう生きるか」などと大上段に構えましたが、少し幅広い観点からお話をさせていただきたいと思います。睡魔に襲われるであろう皆さん方の安眠を、如何に妨害するような話ができるかが、私の課題であります。

自己紹介

まず自己紹介を簡単にします。ワークブックに簡単に紹介されています。

私は1946年2月生まれ（満72歳）で、1973年4月に弁護士登録をして、現在、姫路市で弁護士事務所を主宰しています。ロータリーの関係では、1977年4月に姫路ロータリークラブに入会し、2002年～3年に第2680地区（兵庫）のガバナー、さらに2007年・2010年には、ロータリーの立法機関である規定審議会の地区代表議員を務め、現在はロータリーの友委員会特別顧問ならびにロータリー日本100年史編纂委員会副委員長を務めています。

ちなみに規定審議会というのは、3年毎にシカゴで開催されるロータリーの立法機関でありまして、いま世界に530余りの地区がありますが、各地区から1名の地区代表議員がシカゴに集まり、ロータリーの規則を改廃決定していくわけです。

それから、ロータリーの友委員会というのは、日本では国際ロータリーから認定されたロータリーの地域雑誌である「ロータリーの友」誌を発行している一般社団法人ロータリーの友事務所を全般的に監督している委員会であります。

世界には、このように機関雑誌（THE ROTARIAN）と30の地域雑誌があります。

なお、来る2020年には、日本に最初のロータリークラブが出来てから100年を迎えるので、それを機に「ロータリー日本100年史」を発行する予定で、その編纂委員会の副委員長もしております。

時は春　桜の季節

時は春、桜の季節です。平安末期に西行という歌人がいました。桜をこよなく愛した西行には、桜を詠んだ歌が230首もあるそうです。その一首が、

- ねがはくは花の下にて春死なむ　その如月の望月のころ（西行）

です。旧暦の如月の望月のころ（2月16日前後）というのは今の3月の下旬ころにあたります。西行は、満開の山桜の花が音もなくさらさらと散ってくる、まさにそのころに亡くなったそうです。ちなみに、皆さんは、桜と言えばソメイヨシノを思い浮かべるかもしれませんが、ソメイヨシノは江戸時代に作られた園芸品種ですので、西行の頃は桜と言えばヤマザクラのことであります。

もう1首は、

- 春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪冴えて　すずしかりけり（道元禅師）

これは1968年に川端康成が日本人で初めてノーベル文学賞を受賞したときに、ストックホルムで行った「美しい日本の私―その序説」と題した受賞記念講演のなかで、「日本人のこころ」として、真っ先に披露した道元禅師による「本来の面目」と題した和歌です。

川端康成は、日本人というものは、春になって桜が咲けば、「桜が咲いた。咲いた」と喜んで花見に興じ、新緑になって、谷を渡るホトトギスの鳴き声が聞こえてくれば、「ああいよいよ夏がやって来たな」と感じ、秋空に澄みわたる名月を見れば、月を愛でて観月の催しをなし、冬は、凍りつき冷たく冴えわたる雪の山野を眺めて、すがすがしいと感じる、それが日本人なんだ、日本人の心なんだと説明しました。

嫌いなこと

嫌いなことは、争いごと？（弁護士業?!）です。

弁護士にも闘争心の旺盛な弁護士がおりますが、私は争いごとを苦手にしております。名は体を表わすと言いますが、名前も、安平和彦で、上から読むと、「安全で平和な男」となります。でも弁護士を生業としておりますので、やむを得ず、いやいや争い事にも関与しています。

私とRYLA

私は、第3回RYLA（1981年3月）にロータリアンとして初めて参加しました。35歳の時でした。クラブに入会したのが31歳でしたから、まだロータリーが何たるかも知らない青二才の頃でした。当時姫路クラブの会員で姫路YMCAの総主事であった篠原さんという方に、「安平君、小豆島の余島というところに行ってみないか」と言われて、「何しまんねん」と尋ねると、「行ったらわかる」なんていう答えで、今も昔もロータリーというところはアバウトなところです。ところが、行ってみたら、パストガバナーの今井先生や深川先生、四国の梶浦パストガバナーなど、当時の私の感覚から言うと、偉い偉いロータリーの大先輩たちが、自らファイヤーのトーチを作ったり、道標を作ったりしておられて、びっくりしました。ロータリーには役割分担はあっても上下はないのだということを身をもって示しておられたのでした。そして、翌年の第4回RYLA（1982年3月）ではカウンセラーを務め、そんなことをきっかけに今井先生や深川先生から親しくご指導をいただくようになりました。当時、RYLAというものは、受講生の皆さんだけでなく、お世話をさせていただく私どもロータリアンにとっても、素晴らしい研修の機会でありました。そして、RYLAというも

のに魅せられ、はまっていったのです。私どもはよく言っていたのですが、「RYLAというものは、まるでアリジコクのようなものだ。もがけばもがくほどずるずるとはまり込んでいく。そしていちばん底には『今井アリジコク』がいて、もがいている我々をパクっと咥えてしまう」と。でも我々は喜んではまり込んで行っていたのでした。

今回は38回目のRYLAです。私も今年は72歳となりました。人生は長いと思っていても、いつの間にか歳を取ってしまうものです。皆さんも気をつけなさいよ、若い若いと思っていても、すぐに歳を取って、頭も私のようになるのですよ。

古代インドのバラモン（カーストの最上級の司祭者階層）では、マヌの法典で、人生を四住期というように区分しているそうです。まず、学生期（0～24歳）は、師についてベーダ（バラモンの聖典）を学ぶ時期、次の家住期（25～49歳）は、結婚して家庭を持って仕事に励む時期、そして林住期（「臨終期」ではありません）（50～74歳）になれば、家を出て林に移り住んで自分自身を見つめる時期、最後の遊行期（75～90歳）は、財産も何もかも捨てて死に場所を求める時期、としています。私はすでに林住期に入っており、仕事を卒業してどこかで独り自分と向き合うべき時期に達しているわけですが、なかなかそうはいきません。

また、中国では四神思想というのがあって、東の青龍（春）・南の朱雀（夏）・西の白虎（秋）・北の玄武（冬）の4聖獣にちなんで、人生を同じように、青春・朱夏・白秋・玄冬の4つの時期に区分しているそうです。

「少年老いやすく学なりがたし」

ご承知のように、これは朱熹（朱子）の「偶成」という詩に出てくるものです。もっとも最近では朱熹の作ではないとの説もあるようですが、

少年易老学難成
　　少年老い易く学成り難し
一寸光陰不可軽
　　一寸の光陰軽んずべからず
未覚池塘春草夢
　　未だ覚めず池塘春草の夢
階前梧葉已秋声
　　階前の梧葉已に秋声

「池塘春草の夢」というのは、「池のほとりの堤に萌え出ずる若草のような青春の夢」というような意味でありますし、「階前の梧葉」というのは、「階段の前の青桐の葉」という意味であります。甘ったるい青春の夢に浸っていると、はっと気が付いた時には、世はすでに青桐の葉が赤茶けて秋風に吹かれているよ、というような意味でしょうか。

「人生は苦である。」・・・釈迦はこのように言いました。

すなわち、「四苦八苦」の四苦とは、生老病死（四苦）、すなわち生まれ出ずる苦しみ、そして誰でも老いてしまう苦しみ、そしてやがては病を得て苦しみ、ついには死に直面する苦しみ、これらの四つの苦しみを言います。

それだけでなく、「愛別離苦」…すなわちどんなに愛し合っていてもいずれは別れなくてはならない苦しみ、「求不得苦」…求めても求めても得られない苦しみ、「怨憎会苦」…恨み憎んでいる者とも会わなければならない苦しみ、「五陰盛苦」…そして人生すべてが常に苦しみである、というようなものがあります。これらを合わせて、「四苦八苦」と言いますが、まさに自分ではどうしようもない苦があるのです。

五木寛之は、「人は出生につき、国も地域も、もっと言えば家族も選べない。人間というものは、自分の意思とは無関係にこの世界に押し

出されてくる。われわれは自分の意思や努力、愛や誠意などとは無関係にこの世に生まれて来るのである。」と言っています。まさにあなた方は、自分の意思とは関係なく、そのようにしてこの世に押し出されてきたのです。

しかしながら、人間は過去を選ぶことはできませんが、未来を選び変えることはできるのです。

そのような中で、20世紀末に自分の意思でなく生まれ、21世紀を生きてゆかねばならないあなた方。あなた方は21世紀をどう生きていくのでしょうか?

20世紀はどんな時代であったのか?

そのことを考える前に、では20世紀はどんな時代であったのか、を振り返ってみましょう。

- 戦争の時代
  帝国主義と二つの世界大戦がありました。第2次世界大戦後は「冷戦」と呼ばれる時代となり、資本主義と社会主義の激しい対立が生まれました。
  そして、1989年にベルリンの壁が崩壊しましたが、同じ年に天安門事件もありました。そしてその後も、冷戦後の地域紛争(民族・宗教と地域紛争)が収まることはありません。また20世紀は、人間が初めて「核」を持つに至った世紀でもありました。
- また。地球環境問題が深刻化し、メディアと情報の世紀(インターネットによ、るネットワーク)と呼ばれる高度情報化社会・IT革命の始まった世紀でした。
- このような中、日本は急速に高齢化が進み、1970年に高齢化社会(65歳以上 7.1%)に突入し、1995年には高齢社会(同 14.5%)に入りました。ちなみに、65歳以上の高齢者が人口に占める割合が7~14%に達すれば「高齢化社会」、14~21%に達すると「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」と呼ばれるそうです。

忘れてはならないこと

ところで、第2次大戦中、ナチスによる民族浄化という名目で、アウシュビッツなどの多くの強制収容所で数百万人のユダヤ人が虐殺されました。ホロコーストと呼ばれています。殺された人の正確な数は不明ですが、400万人とか600万人とか、はたまた800万人とか言われています。このことは我々人類としては絶対に忘れてはならない出来事だと思います。

またカンボジアでは、ポルポト率いるクメール・ルージュにより、人口800万人足らずの国で、1975年4月からわずか4年間で、知識階級を中心に200~300万人の人が殺害されました。私のガバナー時代に、カンボジアの片田舎に日本から小学校を寄付しましたが、その折にプノンペン郊外にあるトゥール・スレン元刑務所(元高等学校の校舎)を訪れました。そこでは、教室を改造した獄舎を横1メートル余り、縦2メートル程度に区切った狭い独房に粗末な鉄製のベッドがあり、手枷・足枷が鎖でベッドにつながれておりました。ここでは、1万4000人が拷問の末に虐殺され、頭蓋骨(どくろ)でカンボジアの地図が描かれておりました。

狂気と言わざるを得ませんが、いったい人間というものは何処まで残酷になれるのか?暗澹たる気持ちにさせられました。

21世紀はどんな時代になるのか?

それでは21世紀はどのような時代になるのでしょうか?

少し予想してみるだけでも、

- 人口問題、地球環境・資源問題、格差・貧困問題などのより深刻化
- また、テロの時代?という指摘もあります。まさに21世紀に入った途端の2001年9月11日にアメリカで同時多発テロがあり、3,000人以上の人が亡くなりました。最近でもフランス・ベルギー・イラク等での無差別テロが実

行されています。

- アメリカの孤立化と中国の台頭そしてロシアの独自の行動
  サミュエル・ハンチントンが1993年に文明の衝突という本の中で、超大国アメリカの一強時代が終焉し、単なる強国になると予言しましたが、正にそのような時代となってきています。
- 科学技術の発達、とくに生命科学・バイオ・テクノロジー・生殖医学の発達がより進む世紀でしょう。特に生命科学、生殖医学の進歩は、我々の人生観・倫理観に影響することは必至です。そしてこのような中で、一夫一婦制の崩壊など、家族のあり方も大きく変容を迫られることは間違いありません。
- IT革命がますますの進展し、AI（人工頭脳）があらゆるところで人間に代るでしょう。
- また、一瞬で世界中との取引が可能になるなど、経済のグローバル化がますます進むでしょう。
- そんな中で、日本は2007年に超高齢社会（65歳以上 21.5%）に入りました。

ひょっとしたら、21世紀は、混沌の時代が続くかもしれません。

世界と日本の人口

ところで、世界の人口は、国連による推計によれば、次のようになるそうです。

1802年	10億人
1927年	20億人
1961年	30億人
1974年	40億人
1987年	50億人
1998年	60億人
2013年	72億人
2025年	81億人
2050年	97億3,000万人
2056年	100億人超え
2100年	112億1,000万人

ちなみに中国の人口（国連予想）は、

2015年	13億7,605万人
2025年	14億1,487万人
	（インドが逆転）
2030年	14億1,555万人（ピーク）
2035年	14億832万人
2040年	13億9,471万人
2050年	13億4,806万人
2080年	11億2,257万人
2100年	10億439万人

と推測され、2030年にピークを迎えた人口は、急速に減少に転ずると予想されています。

一方、インドの人口は、

2015年	13億1,105万人
2025年	14億6,163万人
	（中国を逆転）
2050年	17億533万人
2070年	17億5,360万人（ピーク）
2080年	17億3,715万人
2100年	16億5,979万人

と予想され、2025年にインドが中国を逆転しますが、2070年からは減少に転じ、高齢者比率が次第に増加すると予想されています。

このように、少なくとも中国やインドでは、2100年に向けて人口が減少することが予想されているのにかかわらず、世界の人口は増え続けることが予想されています。このことは、アフリカ諸国など、発展途上国での人口爆発が予想されていることによります。

ところで、日本の人口の推移は、

1945年	7,199.8万人
1950年	8,411.5万人
1960年	9,430.2万人
1970年	1億466.5万人
1980年	1億1,706万人
1990年	1億2,361.1万人
2000年	1億2,696.2万人

2010年　1億2,805.8万人
2015年　1億2,709万人
（65歳以上の高齢者26.6%）
2065年　8,808万人
（65歳以上の高齢者38.4%厚労省推計）
となると推定されています。

2025年問題

2025年問題というのがあります。すなわち、2025年までに日本の人口は700万人減少し、15～64歳の生産年齢人口は7,000万人に減少し、他方、65歳以上の高齢者は3,500万人を突破すると予想されています。

さらに、2025年には、団塊の世代が75歳を超えて後期高齢者となり、国民の3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上という、人類がかって経験したことのない「超・超高齢化社会」到来します。

この結果、
労働者人口が減少するため、外国人労働者の受け入れへの動き、
高齢者の一人暮らし世帯の増加
認知症高齢者（要介護）の増加
医療福祉の人材確保
医療保険財政がパンク
年金制度の破たん
などの問題が指摘され、これらに対する対処の必要性が指摘されています。

そのような時代が、皆さんが生きてゆかねばならない時代なのです。覚悟はできていますか?

今回の講師の先生のお話

今回、八百伸弥氏は、組織で必須の人財＝「不存在デメリット」という演題で、彼が手掛けてきたロボット制御による儲かる農業の創業と、それによる地域の活性化について、また吉川雄介氏は、「自分が変わる。世界が変わる。」という演題で、ネパールにおける人道的活動を通して自らの世界を見る眼が変わったと、その体験談を話してくれました。八百氏は31歳、吉川氏は32歳であり、ともにすごい若者です。

なお、バズセッションとフォーラムでは、「桃太郎の鬼退治」の昔ばなしを題材にして、さまざまな論点を議論していただきました。

持続可能性（Sustainability）について

ところで、現在の先進国に住む我々は、豊かさの中で育ち、豊かさに慣れ、あふれるような豊かさの中で暮らしておりますが、未来に向けて人類が生存していくためには、「持続可能性」を考える必要があります。

この持続可能性（Sustainability）という概念は、1987年に「国連環境と開発に関する委員会」（通称ブルントラント委員会）が出した報告書「Our Common Future（我々共通の未来）」がきっかけであり、同書の中で、「Sustainable Development（持続可能な発展）」が人類の課題として取り上げられたのです。

すなわち、「Sustainable Development」とは、「将来世代のニーズに応える能力を損なうことなく、現在世代のニーズを満たす発展」と定義されています。そしてこの概念は、「地球環境資源の有限性を認めながらも、人類の発展は可能である」という、両立可能性を示した概念として、広く受け入れられるようになりました。

その後、1992年のブラジルのリオで開催された地球サミットでは、「人類共通の目的として、現在の経済成長至上主義を、地球の生態系に配慮した（すなわち地球の環境容量に配慮した）発展に転換しなければならない」ということを合意し、さらに、1997年の「京都議定書」では、地球温暖化防止のために、世界の主たる先進国は、温室効果ガスの排出量を「絶対

量」で減少させることに合意し、①無制限な化石燃料の使用は、人類の持続可能性のためには認められないこと、②資源には持続可能な使用量（適正規模）があることが確認されました。

その後、地球環境の崩壊の危険だけでなく、地球規模での貧富の差の拡大と悪化する途上国の貧困問題という人間社会のひずみが、人類社会の存続を脅かす可能性があることが強く認識されるようになりました。すなわち、「持続可能性」という言葉は、「地球環境の持続可能性」という意味だけでなく、「人間の社会経済システムの持続可能性」も含まれるという認識が生まれました。

2000年9月の国連ミレニアム宣言では、21世紀の国際社会の目標として、2015年までに達成すべき8つの具体的な目標と18のターゲット（ミレニアム開発目標・MDGs）を定め、その中では、貧困と教育・ジェンダーの平等など、途上国の基本的人権の確立に密接に関係するテーマが優先課題とされました。

その後、2002年ヨハネスブルグ地球サミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）でも、持続可能な発展のためには、環境面の取り組みだけでなく、南北問題・貧困問題という経済社会的な課題の克服が不可欠であることがあらためて確認され、2010年のMDGsサミットを経て、2012年には国連持続可能な開発会議（リオ+20）において、「私たちが望む社会」に向けてのワーキング・グループが設置されました。

このようにして、現在の国際社会での共通認識としては、「持続可能な発展とは、地球の有限性を前提とし、南北間格差の縮小と貧困問題の同時解消を目指した発展のことである。」とされています。

その後、2015年9月には、「国連持続可能な開発サミット」が161カ国の首脳の出席を得て開かれ、持続可能な開発のための2030アジェンダを採択し、17の持続可能な開発目標と169項目のターゲットを定め、「SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS（SDGs）」と呼ばれています。

その内容については、次のとおりです。

目標１：あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ
目標２：飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する
目標３：あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する
目標４：すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
目標５：ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る
目標６：すべての人々に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する
目標７：すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する
目標８：すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク

を推進する
目標９：レジリエントなインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る
目標10：国内および国家間の不平等を是正する
目標11：都市と人間の居住地を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする
目標12：持続可能な消費と生産のパターンを確保する
目標13：気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る
目標14：海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する
目標15：陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る
目標16：持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する
目標17：持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

ロータリーの夢と人生

このような状況下で、あなた方は21世紀を如何に生きるべきでしょうか?

私には、あなた方に指し示すことができる確たるものはありませんが、参考にして欲しいことがあります。それは、ロータリーの先輩たちが私たちに教えてくれたものです。それは、ロータリーの夢である「世界理解と親善・平和の実現」であり、「貧困と飢餓の撲滅」であり、「ポリオの撲滅」であり、何よりも「職業倫理の確立」と「青少年の健全育成」などです。

ところで、ロータリーには、ロータリーの目的（綱領）というものがあります。すなわち、次のとおりです。

ロータリーの目的（綱領）

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

第１　知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
第２　職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
第３　ロータリアン一人一人が、個人として、また事業及び社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
第４　奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

ちなみに、ロータリーの第一標語（モットー）は、「Service Above Self 超我の奉仕」でありますし、国際ロータリーの使命としては、「職業人と地域社会のリーダーのネットワークを通じて、人々に奉仕し、高潔さを奨励し、世界理解、親善、平和を推進することである」としています。

また、ロータリーの中核的価値観としては、奉仕（Service）、親睦（Fellowship）、多様性（Diversity）、高潔性（Integrity）、リーダーシップ（Leadership）を掲げており、このうち、ロータリーでは、多様性（Diversity）と高潔性（Integrity）をとくに重要と考えています。

それでは「ロータリー」とはいったい何なん

でしょうか?決議23−34の第1条は、次のように言っています。

"ロータリーは、基本的には、ひとつの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は、—「超我の奉仕」の哲学であり、これは「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。"

「Fundamentally, Rotary is a philosophy of life that undertakes to reconcile the ever present conflict between the desire to profit for one's self and the duty and consequent impulse to serve others. This philosophy is the philosophy of service - "Service Above Self" -and is based on the practical ethical principle that "He profits most Who serves best"」

すなわち、我々ロータリアンにとって、「ロータリー」というのは、ひとつの「人生哲学」であり、それは「利己と利他の調和」の哲学なのです。

四つのテスト

そこで、これらの奉仕哲学の具体的実践例のひとつとして、まず最初に、ロータリーが大変大切にしている「四つのテスト」について述べてみたいと思います。これは、1931年にハーバート・テイラー（Herbert J. Taylor）が、倒産寸前のアルミ食器会社の再建のために考え、実践したスローガンであります。

テイラーは、1931年に「クラブ・アルミニウム社」の再建を引き受けました。当時のクラブ・アルミニウム社は、従業員250人を擁するそれなりの規模の会社でありましたが、経済恐慌のあおりで破産状態（40万ドルの借金）に陥っていました。

当時のアルミ食器業界の現状は大変厳しく、如何にすれば、再建が可能になるかを考えたテイラーは、6週間の沈思黙考の結果、次の24単語による社是を考案しました。それが以下の「4つのテスト」です。

The Four-Way Test
Of the things we think, say or do
Is it the TRUTH?
Is it Fair to all concerned?
Will it build GOODWILL and BETTER FRIENDSHIPS?
Will it be BENEFICIAL to all concerned?
四つのテスト
言行はこれに照らしてから
1, 真実か　どうか
2, みんなに公平か
3, 好意と友情を深めるか
4, みんなのためになるかどうか

テイラーは、まず自分で実行し、次に、会社の四部門担当の重役に、それぞれの信条に反しないことを確認したうえで、全従業員に発表して実行段階に入りました。

彼は、まず、自社の全商品の宣伝広告文に、「最上級の表現と他社製品より優位する表現」を禁止しました（誇大広告の禁止）。そして、宣伝の内容としては、当該商品の特徴と長所短所を忠実に述べさせるようにしました（真実の開示）。そしてこれがクラブ・アルミニウム社の経営方針となりました。

ちょうどその頃、印刷物を発注するための競争入札を行ったところ、ある業者が他の業者より格段に低い破格の金額で落札しました。ところがその業者は、その後に見積計算に500ドルの計算間違いを発見したのです。業者は自己責任であるとして損失を覚悟しましたが、その事実をクラブ・アルミニウム社の重役に伝えました。これを受けて開かれたクラブ・アルミニウム社の役員会では意見が分かれました。会社の資金繰りも楽ではない状態にありました。

最初に発言した役員は、「業者側に落ち度があり、われわれに落ち度がない以上、価格を

増額してやる必要はないのではないか。」 これに対して、もう一人の役員が「それはそうだが、それでは四つのテストの第2（ Is it Fair to all concerned ?）に違反することにならないか。」（すなわち、相手のミスに乗じるのはFairではないのではないか?）これを聞いた最初の役員が、「そうだった。私の発言を取り消して、500ドルを増額することを提案します。」と提案し、満場一致で500ドルを増額することが決まったというのです。

このことが、まもなく社の内外に伝わり、取引先や消費者に大変高い評価を受け、従業員だけでなく、従業員の家族や関係業者等も希望を持って仕事に励みました。そして、5年後には、再建に当たっての新たな6,100ドルの借り入れも、前からの40万ドルの借金もすべて返済し、15年後には100万ドルの配当金を株主に対して支払うことができるようになったのです。

ハーバート・テイラーは、その後、1954年に国際ロータリーの会長に就任し、「四つのテスト」の版権をRIに譲渡し、自らのターゲットにこれを掲げて全世界のロータリアンを唱導しました。

売れ残りのレインコート

次に、第2の具体例として、パーシー・ホジソンの「奉仕こそわがつとめ」の中の「売れ残りのレインコート」の例をご紹介します。

イリノイ州のあるデパートで、社長が新入りの広告宣伝部員に言いました。「ねえ、君。わが社には売れ残りのレインコートがたっぷりとあるんだ。店晒し品だが、中には新品同様の物もある。これを格安の値段で捌いてしまいたいのだ。捌けなければ、川にでも流してしまうより仕方ないだろう。」

新入りの広告宣伝部員は、「社長、わかりました。任せてください」と胸をたたきました。翌朝、新聞を開いた社長は、思わずくわえ煙草を落としそうになりました。そこには、でかでかと広告が載っていました。

曰く、『当社には売れ残りのレインコートがたっぷりあります。店晒し品ですが、中には新品同様の物もあります。当社は、これを格安の値段でお分けいたします。捌けなければ、川にでも流してしまうより仕方がありません。』

社長は、頭にかっと血が上って、「あの野郎、わが社の赤恥をさらしおって。行ってたたき出してくれる。」と、真っ赤な顔で会社に駆けつけました。折から通りかかった重役が「社長、いったい、どうしたんですか?」と尋ねると、社長は、「君い！あの新聞広告を見たかね！わが社の赤恥をさらけ出しおって。今から、たたき出してくれる！」と言いました。ところが、重役は、「でもね社長、レインコートは開店後30分でみんな売り切れたのですよ。売り場では、客の混雑で大変でした。」と報告したのでした。

客は、何を買ったのでしょうか?レインコート?もちろんレインコートも買いましたが、客は、限りなき率直さ、正直さを買ったに違いありません。

このように、ロータリーでは、「満足」という商品を売って「感謝」という対価をいただく。「真実」という商品を売って「信用」という対価をいただく。それが商売の秘訣だとするのです。

日本の伝統的実業倫理

次に、日本の伝統的実業倫理として、近江商人の「三方良し」の商人道と二宮尊徳の報徳思想を紹介します。他にも、石田梅岩の「石門心学」や渋沢栄一の「論語と算盤」なども大変参考になる思想です。

まず、近江商人の「三方よし」の商人道ですが、彼らは、商いの基本は、「売り手よし」「買い手よし」の、売り手・買い手双方の満足（win winの関係）ということのほかに、「世間よし」として、その取引が世間に認められ、社

会全体の幸福につながる倫理に適った商いをすること、すなわち「三方よし」（win win win の関係）が商売の秘訣である。このことが、行商先の顧客の間に「信用」という目に見えない財産を築いていき、家業を未来永劫に存続させていくのだ。」と言い、顧客満足を高めることこそ、家業永続のもとになる（sustainable development 持続可能な発展）と主張したのです。

次に、二宮尊徳の「報徳」の教えについて紹介します。

彼は、道徳経済一元論（道徳と経済の融和・両立）を主張し、「経済を忘れた道徳は寝言である。道徳を忘れた経済は罪悪である。私利私欲に走るのではなく社会に貢献すれば、いずれ自らに還元される。」と主張しました。

「二宮翁夜話」の中に、彼が箱根湯本の温泉場で弟子たちに説いた「湯舟の話」があります。彼は、「湯舟の一方から温かい湯が流れ込んで来たら、誰だって自分のほうに掻き寄せたくなるであろう。だけど、いくら掻き寄せたって、その湯はお前の傍らを通って向こうの方に去って行ってしまうではないか。そうではなしに、温かい湯が流れ込んで来たら、その湯を人の方に押してあげなさい。そうすればその湯は相手を温めて、いずれお前の方に巡り帰ってくるではないか」というのです。

すなわち、

「たとうればこの湯舟の湯の如し。これを手にて己が方に掻けば、湯わが方に来るがごとくなれども、みな向こうの方に流れ帰るなり。これを向こうの方へ押す時は、湯向こうの方へ行くがごとくなれどもまたわが方へ流れ帰る。少しく押せば少しく帰り、強く押せば強く帰る。これ天理なり。それ仁と言い、義と言うは、向こうへ押す時の名なり。わが方へ掻く時は、不仁となり不義となる。」「人体の組み立てを見るがよい。人の手は自分の方へ向いて自分に便利に出来ているが、また向こうにも押すことが出来る。これが人道のもとだ。鳥や獣の手は、人と違って、ただ自分の方へ向いて自分に便利に出来ているだけだ。人たるものは、他人のために押す道がある。それなのに自分の方へ手を向けて、他人のために押すことを忘れるのは、人にして人ではない。即ち禽獣である。恥ずかしいことではないか。ただ恥ずかしいばかりでなく、天理に反するから、遂には滅亡する。だから私は、常に奪うことには益はなく、譲ることには益がある。譲ることには益があり、奪うことには益はない。これが天理である。よくよく味わって欲しい。」と言っております。

これらの日本の伝統的実業倫理は、優れて因縁論の世界を説き、目先の利益に目がくらんで破滅に至ることの愚かさを説いたのであります。

翻って、近年の職業倫理の退廃は目を覆いたくなるものがあります。たとえば、

少し古くなりますが、三菱自工の欠陥隠し・中央青山監査法人の粉飾決算加担事件・耐震強度偽装事件や、雪印食品・日本フード・ダスキン・ミートホープ・比内鶏・船場吉兆・青森県果工・三笠フーズなどの食品関係会社の不祥事や原料産地偽装等々がありました。雪印食品・日本フード・中央青山監査法人は会社が消滅し、船場吉兆も結局は破産に至り、従業員は解雇になりました。また、姉歯被告は懲役5年の実刑になりましたし、ミートホープと比内鶏では経営者がいずれも不正競争防止法違反で４年の実刑となりました。

それどころか、ごく最近でも、

東芝の不正経理、三菱自動車・東洋ゴム工業・神戸製鋼所ならびに三菱マテリアルの子会社・東レの子会社での検査データーの改竄不正、タカタの欠陥エアバッグ、日産自動車・SUBARUでの無資格者検査、SUBARUで燃費データー書換え疑惑、リニア新幹線入札での大規模談合、川崎重工による新幹線車両の台車の欠陥など、企業の不正は後を絶ちませ

ん。

外にも、今新聞・テレビを大変賑わしている財務省の決済文書の改ざん疑惑もあります。

いったい、日本人の正直さは何処に行ったのでしょうか？われわれの小さいときは、何も言わなくても、"悪いことをするとお天道さんが見ているぞ"と言われたものです。また、坂東武者は、「名こそ惜しけれ」として、"恥ずかしいことをするな"と言い、常に自己を律することによって、他人を大切にすることができるのだと言いました。これが日本人の伝統的精神ではないですか。

人生は因縁因果の世界

私は、つくづく「人生は因縁因果の世界」と思うのです。易経には、「積善之家必有余慶　積不善之家必有余殃」とありますし、「善因善果　悪因悪果」という類似の言葉もあります。また、伝教大師最澄は、「道心の中に衣食あり」と言っておりますし、日蓮上人は、「人に物を施せば、我が身の助けとなる。たとえば、人のために火を灯せば我が前明らかになるが如し」（食物三徳御書）、すなわち、「暗い夜道で難渋している人がいればその人のために明かりをさしかけてあげなさい。そうすれば、さしかけているあなた自身の足元も明るく照らされるでしょう」と言うのであります。昨夜のカウンシルファイヤーに向けての山道で、あなた方は前を歩く仲間の足元を懐中電灯で照らしてあげていたと思います。まさにその明かりは、その仲間の足元を照らして明るくすると同時に、あなた方自身の足元も明るくしていたじゃありませんか。

さらに、道元禅師は、「愚人思わくは、利他を先にすれば、みずからが利はぶかれぬべしと。しかにはあらざるなり。利行は一法なり。あまねく自他を利するなり。」（自利利他一行）と言っています。すなわち、愚かな人は、人のために施すと、自分の利益がなくなってしまうと考えるが、そうではないのだ。人のためにすることは自分のためにもなるのだ、というのです。昔から「情けは人のためならず」という諺がありますが、このことわざの趣旨は、人に情けをかけるのは、人のためでなく、巡り巡って自分に還ってくるのだから、自分のためにするのだ」という意味なのです。

皆さんは、「布施」という言葉を知っていると思いますが、「布施」は「布施行」と言って、仏道修行者が実践しなければならない行、すなわち六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧）の修行の第一とされるべき「行」なのです。「行」ということは、自分に還ってくることを意味します。したがって、布施は、布施をさせていただくことが行なのです。

ボランティアも同じです。「人にしてあげる、してやるという」気持ちではなく、「人に奉仕させていただく」といった謙虚な気持ちですることが必要だと思うのです。そして、そのような行為は、いずれ巡り巡って自分に還り、自分の人生を明るく照らすのです。

しかしながら、自分への報いを期待し、そのことを目的として奉仕をしてはなりません。エドワード・カーペンター（英国 1844～1929）という人が、次のように言っています。

「一つ一つの行いにあなたのそそいだ愛の報いを求めてはならない。もし、愛の報いを期待すると、それでお終いになる。そうでなく、愛を目的にあらゆる行いをしなさい。そうしたときは、今求めているものが最後に手に入るのだ。そのことが、はるか昔の思い出になった頃、あなたのもとには、誰も奪っていくことの出来ない永久不滅の財産が残っていることであろう。」

ロータリーがRYLAセミナーを実施している意味

39年前（1979年）に第1回のRYLAを開催したとき、まだまだ日本は豊かな国ではありませんでした。学生たちには学園紛争の余韻が残っており、受講生たちは、ロータリアンを含めた大人たちに不信感を抱いていました。そのころに、今井鎮雄元RI理事と深川純一パストガバナー、そして四国の梶浦パストガバナーが、「青年たちに、より高いリーダーシップを備えてほしい」としてこのRYLAを始めたのです。

飽食の時代、豊かな時代に育ったあなた方は、今回のオープニング・パーティなんかなんとも思わないと思いますが、あなた方と違って、当時の参加受講生たちは、まだまだ貧乏でした。その彼らが、「豪華な」オープニング・パーティに目を見張り、お酒も飲んでもいいよと言われ、参加費もロータリーが全部負担するよということにびっくりして、まるで思想教育でもされるのではないか、との疑心暗鬼でこの余島にやって来ました。ところが、最終日には、彼らは、"今まで大人たちを信用してこなかったが、このRYLAに関わっているロータリアンだけは信用する"と言ったそうです。

そうなんです。このRYLAは、講師の先生方の有意義な講義と、思索の時間・バズセッション・フォーラム・カウンシルファイヤー、そしてキャビンタイムでの互いの語り合いを通じて、あなた方にロータリーの思いと夢を伝えたい、リーダーとしてのより高い心構えを養ってほしい、という思いで続けているのです。

人生は決して長くはありません。どんなに元気な人も、やがては肉体も衰え、百歳まで生きるのは至難の業です。あなた方は今は若いですから、この先の長い人生において、人生というものがどんなに素晴らしい贈り物をあなた方にもたらしてくれるか、と期待しているかもしれません。しかし、そうではないのです。あなた方自身が自らを変えていく努力をしなければ何も生まれてこないのです。「蒔かぬ種は生えない」のです。あなた方自身がこれからどう生きるかが問われているのです。

あのアウシュビッツ収容所に収容されたユダヤ人精神科医のビクトール・フランクルが「夜と霧」という感動的な作品を残しています。その中で、あのアウシュビッツの収容所の中での、明日はガス室行きか、それとも明後日かという、将来に何の希望も持てない絶望的な状況の下で、自らの命を絶ってしまった人たちさえもおりました。そのような絶望的な極限状況の中で、フランクルが生き延びることができたのは、ひょっとして明日解放されるのではないかなどと、残された人生に何かを期待しては絶望するのではなく、人生から（神から）問われた者としての自分を意識したとき、すなわち、そのような極限状況のなかで、「お前は今何をなすべきかという問いを、人生から（神から）投げかけられているのだ」と、発想の転換をし得たからだと言っております。

かの有名なマルティン・ルターも、「たとえ明日が世界の終わりだとしても、今日私はリンゴの木を植える」という言葉を残していますが、これも同じ境地の言葉でありましょう。

この余島の食堂の前の礎石には、

"人と出会い
　神と交わり
　　愛の火のもえるところ"

と、元RI理事の今井鎮雄先生の言葉が刻んであります。すなわち、皆さん方は、この言葉どおりに、このRYLAにおいてお互いに出会い（人と出会い）、互いに真理を語り合い（神と交わり）、固い友情と絆を築いた（愛の火をともした）のではありませんか。今井先生の、この余島に掛けられた想いを、皆さんにも共有して

いただき、未来に向けて自らを高めて行って欲しいと思います。

受講生の皆さん方の今後のご健闘を、心より祈念して、私の講演を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

（この記録は、最終日の講義記録に補充訂正を加えたものです）

参加者感想文

■■■ A班 ■■■

●カウンセラー　野村　栄一

緊張で迎えた受講生の顔がこの４日間で何かを成し遂げた達成感一杯の顔に変わる。

カウンセラー初めての体験であったが、「負ぶうた子に教えられ」私自身も成長することが出来たように思う。彼らのこれからの人生はさまざまだが、幸多からんことを祈る。

周りで支えていただいたスタッフの皆様にも感謝。機会があれば再びチャレンジしてみたい。

●カウンセラー　冨田　裕子

長い様で短く感じた３泊４日でした。カウンセラーという立場ではありますが、私自身が楽しめた４日間でした。4日前にはまるで接点のなかった11人が、A班に入ることになり、寝食を共にすることになりましたが、その４日間でのいろいろな化学反応。忘れられない思い出となりました。セッションを重ね、相手を尊重し、自分をも成長していく実感が得られたことでしょう。皆さんは素晴らしい仲間と出会いましたね。この出会いを大切にしましょう。

皆さんのこれからのご活躍を心からお祈りいたします。

●三木　悠嗣

今回の研修は、当社の社長からの指示で、詳細を確認しない状態での参加でした。従来、参加指示が出る研修は、100%次期経営者（同業種の場合が多い）を対象にしたものばかりであったので、現地に到着した瞬間、正直あっけにとられてしまいました。

参加者の大半である20代前半（私は32歳）に世代差を感じ、壁をつくってしまった事は反省点としています。しかし、色々な環境で前向きに取り組む年下の方々を、しっかり目の前で見ることができ、良い刺激になりました。

また、予想していた経営者としての実践的なノウハウも、さまざまな観点から勉強させていただけました。今まで受講してきた講義と比較しても、レベルが高かったと感じています。すべてのプログラムに意味を感じましたし、これから進むべき方向の道しるべを示していただけたと感謝しています。

この度は、参加させていただきありがとうございました。

●西本　秀

社長に言われて参加した今回の研修は、正直乗り気ではなかった。各地域の次期経営者のような人間が集まり、業界や経営の話など、いわゆる"意識高い空気"に包まれるのではないかと思っていたからだ。しかし、参加者は年齢も職も生い立ちもみんなバラバラ。薬科大学に入り、薬剤師として働く自分は、その多様性に面食らった。どうしていいかわからなかったが、結果から言うと、最終日には、普通の元からいる友人と変わらないレベルで接していた。何も考えず、なりゆきで関係が構築されたわけではもちろんない。チームの一員として関わりたいと思う一心で、自分が変わろう、開いていこうと行動したからだ。ずっと同じような世界で生き、考え方も身の周りも固まってしまった（あるいはそう思い込んでいた）自分にとって、自分を見つめ直す最高のきっかけになったと思っている。だが、多様性があると当然ベクトルもばらつく。相手をどう納得させるか、自分の意志とどう折り合いをつけるか、チームとしてどこへ向かうのか、その難しさも痛感した。

講義、レク、思索の時間も刺激的だった。組織の中でどこを目指すか。実際行ってみると、自分の考えと全く違う世界があること、自分の意見を持つ難しさ、自分を伝えるために自分の心を開くこと、多くの考えが自分の中をかけめぐり、お腹がいっぱいだ。（笑）

議題を共有し、議論する。それによって自分が変わるという研修目標は達成できたと思う。

「3日間だが、3/365日間にはならない。」

その通りだった。この研修会の全てに感謝している。

●三嶋　明宏

今回のセミナーで、様々な事を学び、体感し、生きるという事を見つめられた気がします。ビルや書類で動いているように感じていた現実の世の中で、自分を素直に受け入れられたのではないでしょうか。

人が多く環境から島に移動し、最初は人見知りでも、好感のある対応や楽しいものにしたいという思いが、かえって自分を無理させていたのかもしれません。夜のバズセッションで、自分の思うことや進め方という所で、なかなかかみ合いませんでした。しかし、いろいろ話し、考えを開いてみた時、話が進んでいった様に感じられました。

個人の主張や正論だけではない人の側に立つ。自分と他の存在。その人がいて、自分の言葉と考えが成り立つことに気付く事で、チームの人達を信じ、信頼に向かっていけました。

このセミナーに参加している状況と世界の状況には、リンクするところが必ずあって、どう出口に向かっていくのか、自分を信じるには?人と協力する時には?自分と考えが違った人と出会った時には?自分はどう生きて、絵を描くのか。よくそう考えたりします。プロで活躍する作家達。夢に届かないもどかしさ。人と比べるというのは苦しくもあり、安心にもつながるのかもしれません。でも、それだけじゃダメで、自分がどう行動するかで世界に影響しうると思えました。あなたはぼくで、ぼくはあなた。人を傷つける事は自分を傷つける。そういう考えをもっていた自分を信じることが出来たのです。

今を生きる。それは風の音、火がゆれ動く様、波と潮、土から生える植物、全てが影響し合い、共鳴することで、今の奇跡が生まれた気が

します。

こんな機会に参加できた感謝と、RYLAが次の世代、また次の世界につながることを祈り、行動していきます。ありがとうございました。

●重里　匡哉

今回のRYLAセミナーでは、自分を変えるきっかけを得られたと思います。誰も自分を知らない環境に飛び込む事が初めてで、そこで自分を出せるか、周りと仲良くなれるかが不安でした。

バズセッションでは、皆の前で手を挙げて発表する経験が今までなく、最初は自分にできるのか不安でした。そこで発言するなど、今までの自分では考えられないことでした。しかし、皆が本気で討論し、いい意味でぶつかり合い、気付けば自分もそれに参加していました。最初は周りのレベルの高さ、自分のレベルの低さを痛感していましたが、何とか入ってやろうと意地になっている自分がいました。もし、このセミナーに参加していなければ、このような経験を得る事はなかったかもしれません。最初は話し合いがまとまらず、話し合いの話し合いが続いていましたが、メンバーのある一人が「リーダーを決めよう」と提案し、そこから話し合いがスムーズになり、これがリーダーシップなのかと感化されました。

バズセッションの発表では、自分たちが一番だったと思っています。この経験は本当に無駄にしてはいけない、自分を変えるきっかけだと心に刻みます。

A班のメンバーは、皆自分を持っていて、とくに3日目のバズセッション後の夜、皆が素の自分を出していて、3日目にして、A班でよかったと心から思いました。A班がここまで仲良く団結できたのは、カウンセラーのノムさん、ヒラリーのおかげだと思います。本当に感謝しています。2人の夫婦漫才は、本当におもしろく班が仲良くなるきっかけにもなっていたのかなと思いました。ノムさんのキャラクター、ヒラリーのキャラクター、そしてA班のメンバーのキャラクターが合致して、最高のチームになったと思いました。ノムさん、ヒラリーさん、本当にありがとうございました。一生忘れられない経験でした。

最後に、今回のRYLAセミナーに関わっていただいた関係者の方々、本当にありがとうございました。この経験を絶対自分のものにします。今回のセミナーに参加できて本当に良かったです。

●林　翼

今回ロータリーのセミナーに参加させていただいて、自分自身に少しではありますが変化を感じています。

初日は、初対面の人しかいない中で3泊4日を過ごすことに、不安と楽しみの両方が入り交じったような心境でした。講義を共に受講し、共有できたり、生活を共にする中で、次第に仲間がどういった大人たちなのかなど、コミュニケーションを通じて理解し、不安が徐々に薄れていき、楽しさが大きくなりました。しかし、上手くいかないこともあり、フォーラムの話し合いをする中で、個々の意見が強く、なかなか話し合いが進みませんでした。そこで私は、今回のセミナーのキーワードの中に「リーダーシップ」という言葉があったことに気付いたので、手を挙げてリーダーを決めたほうがいいのではないかと提案し、私がグループのリーダーを務めることになりました。私がまず意識したことは、

まず発言者の意見を受け入れるということでした。受け入れずに否定してしまうと、発言者の積極性が報われず、発言する機会も減ってしまうと考えたからです。また、時間を設定し、今の時間に話し合うテーマを明確にし、話し合いがスムーズに進行するようにしました。当初は長々と話し合いをし、テーマも明確に決めていない中で進行していたため、全く話し合いの成果が上がらない状況を打破するために、以上の2点を決まりごととして進めると、1時間以上の話し合いで決まらなかったことが10分で決まるという結果になりました。そしてその後も順調に進行し、グループ全員が納得できたフォーラムにすることができました。

この経験から学んだことは、リーダーの重要性、リーダーシップの取り方でした。あくまでも対等の立場でのリーダーシップということが重要だなと感じました。今回の学びは、今後の私にとって、今は小さな変化だと思いますが、10年後、20年後には、余島での経験が大きな分岐点だったと感じると思っています。本当にありがとうございました。

●松本　慎太郎

僕は最初、このセミナーに参加するのは乗り気ではありませんでした。営業の仕事をしているにもかかわらず、人見知りで、集団生活をすることに、とても不安な気持ちでいっぱいでした。いざ余島についてみても、やはり人見知りで、班のみんなともなかなか打ち解けようとしませんでした。初日も2日目も、早く帰りたいとばかり思っていて、講演も頭に入ってきませんでした。でも、班のみんなでレクリエーションやキャビンでの時間を過ごしていくうちに、みんなと仲良くなっていき、3日目にはもう少し余島にいたいと思いました。バズセッションでは、「人間では倒せなかった鬼を何故桃太郎は倒せたのか」について、班ごとに分かれ、皆で調べて討論し、夜中の2時くらいまで皆で必死に頑張りました。

そして発表会の日、僕が発表をする役に選ばれました。僕はもともと大人数の前で発表するのが苦手で、授業でもいつも発表することから逃げていましたが、このRYLAセミナーに来て、何か一つ自分を変えるきっかけをつくりたいと思い、発表の大役を引き受けました。でも、やはり緊張して、呂律も回らなくなり、カタコトになってしまいましたが、班の皆からは良かったとほめてもらい、気持ちが楽になりました。

初めは嫌がっていたこのRYLAセミナーも、自分が一皮むける良いきっかけになったと思います。また来年も一皮むきに行きたいと思います。

●野口　優也

私は、本当はRYLAに行くつもりはなかったけれど、松山大学ローターアクトサークルの会長からの猛烈な勧誘により、行ってみることに決めました。最初ついた時には「いやだな。」「帰りたい。」という気持ちが強かったです。グループに分かれた時、全員知らない人で構成されていたため、最初は不安が大きく、グループの中で最年少というのもあり、やっていけるかなと思っていました。しかし、グループの人は優しく、起きれない自分を起こしてくれたり、率先してゴミを捨ててくれたりしました。とても良い人ばかりで良かったなと思いました。

カリキュラムでは、2日目のバズセッションで話す力や聴く力もつき、仲良くもなれるとても良いカリキュラムだと感じました。

私はこの4日間を通して、話す力、聴く力がついたように感じました。友達となら話し合いで簡単に発言できたのですが、知らない人の中で発言できるようになったのは、やはり成長したのではないかと思いました。

●森崎　瑠斐子

3泊4日で、無人島で初対面の人と生活すると聞いて、始めは不安でいっぱいでした。人見知りで人の前に立つことが苦手なのに、リー

ダー研修に行っても仕方がないと思っていました。でも、いざ参加してみると、過密なスケジュールにそんなことを思う暇もなく過ぎていきました。3日目の夜には班のメンバーに、友人や家族にも話さないようなことまでポロっとでてきて、とてもびっくりしました。

また、いろいろな先生の講義を聴けたのもいい経験でした。理解が難しいこともありましたが、何か一つでも実際にやっていけるようにしたいです。

セミナーが終わって、自分に変化が起こったのかまだわかりませんが、今回セミナーに参加したことをいかして、成長していきたいです。

最後に、この素敵な経験をするにあたって、カウンセラーを担当してくださったノムさん、ヒラリーさん、関わってくれたすべての人に感謝を申し上げます。

●杉岡　千佳

青少年指導者養成セミナーに参加する前から、内容が明確ではなかった為、不安を感じていましたが、余島に着いてからも何もなく、更に不安を感じていました。また、グループも友人と分けられ、人見知りの私にはとてもつらかったです。はじまりが嫌なこと続きで、正直帰りたいと思っていました。しかし、日を重ねるにつれ、余島にも慣れ、グループの方とも仲良くなっていき、帰りたいと思う気持ちがなくなりました。

人見知りがひどく、食事中喋れない私に話してくれたのが、カウンセラーのヒラリーさんでした。ヒラリーさんは私に話を振ってくださり、本当に助かりました。ノムさんも沢山面白いお話をしてくれて、グループになじめるようになってきました。グループの方にも恵まれ、落ち着いた雰囲気がとても好きでした。一人一人個性も豊かで、それも良かったと思います。

バズセッションの時は、なかなかまとまらず、始めはどうなるかと思っていましたが「リーダーをつくろう」と発言してくれたおかげで、スムーズに進み始めました。このように様々な職業の人や、年齢の違う人と話す機会がないので、バズセッションはとてもいい経験になりました。

講師も大学の講義とはまた違い、いい勉強になりました。特に一番印象に残っているのは「くらべる」「苦ラベル」という言葉です。私はどうしても人と比べてしまう所があるので、お話を聞いて思いました。

キャビンタイムの飲みニケーションは人見知りの私にはとても助かりました。このセミナーで課題が見つかりました。それは「人見知りを直すこと」です。様々な人に自分から話しか

けられるよう、頑張っていきたいです。最初は嫌でしたが、セミナーに参加して自分を見つめ直す機会にもなったので、とてもよかったです。ありがとうございました。

●廣瀬　由佳

私にとってこのRYLAセミナーは来たくてしかたないと思っていた活動でした。IACに入っていた際に声を掛けていただいたので、受講できて嬉しく思います。

始めから不安要素はなく、とても楽しみにして余島に着きました。この3泊4日で、何枚紙があっても足りないほど、大きな経験をさせていただきました。その中で、強いて一つあげるならば、人との関わりについてです。私はもともと人前で発表するのが好きで、小学生の頃は自分から率先して授業中に発言するタイプでしたが、いつからか自分の気持ちを人に伝えることが減り、周りの意見に妥協することも増えました。

セミナーでは、自分の思っていることや考えていることを人に伝える機会ばかりで、気がつくと昔の自分のように率先して手を挙げている私がいました。また、その変化した自分を少し好きになることもできました。

初日の夜、あまり話に花が咲かず、沈黙ができてしまうことも多々ありました。バズセッションを通して、

「皆が納得できる内容を」を大切にし、全員が意見を出して考え、語り合いました。そのこともあり、最後の夜は話が尽きないほど盛り上がりました。初日からは想像できないほどでした。これは、メンバー全員が「自分が変わった」ということであり、だからこその結束力だと思います。

今回のセミナーで感じた気持ちを大切にし、またメンバーで集まるなど、自分を刺激しながら、もっと自分を高めていきたいです。ありがとうございました。

●村上　寿里

はじめの挨拶をされた方々が、「最終日にはみなさんすごく良い顔をされている。」と言われていましたが、本当にそうなのだな、今回参加することができて本当に良かったな、というのが今の感想です。

講義の中では、八百さん、吉川さんから新しい事を学ばせてもらったり、今の自分の考え方や行動の仕方を振り返る機会をいただけました。特に自分で再確認でき、少し自信となったのが、吉川さんの話の中でできた「行動することの大切さ」です。これからも自分の興味のあることや、良いと思うことにはどんどん挑戦していきます。

次に印象に残っていることは、ヒラリーやノムさんも含めたA班のみんなとの時間です。レクリエーションやバズセッションを通して、真剣に考えて話し合ったり、意見をまとめていけたからこそ、3日目の夜には、普段はあまり人には話さないような話までできる関係になれたのだと思います。本当に良いメンバーに出会えました。A班のみんな、本当にありがとう!大好きです。

最後に、これからのことです。今回のセミナーで、自分を見つめ直す時間の大切さをすごく感じました。これからもいろんな選択をする機会が多くあると思います。その時には、自分がどう在りたいのか、しっかりと見つめ直して、後悔のない人生を生きていきたいと思います。

■■■ B班 ■■■

●カウンセラー 畑中 伸介

そもそも私は、RYLAを受講したかったのですが、ロータリアンは受講できないということで、それなら、ということでRYLA委員になりました。そしてRYLA委員になり、２年間スタッフとしてRYLAに携わらせていただき、この度やっと念願のカウンセラーをさせていただきました。

スタッフとして係わっていた時には、原則受講生と係わることはなく、毎夜キャビンではどのようなことになっているのか、とても気になっていましたが、ようやくその中に入ることができて、とてもうれしかったですが、その一方で、初めてのカウンセラーということで、様々な不安もありましたが、町田カウンセラーに助けられ、またとてもステキな受講生10人にも助けられ、私自身にとても有益な４日間を過ごすことができました。

私が初めてカウンセラーをさせていただいたB班の皆さんが、このRYLAで経験したことをいかして、今後の人生をより素晴らしい人生にしていただければ、とてもうれしいです。

第40回RYLAに係わっていただいたみなさんに感謝し、そして何よりも町田哲子カウンセラーとB班のみなさんに感謝します。ありがとうございました。

●カウンセラー 町田 哲子

この度、ご縁でこの余島まで来る機会をゲットさせていただき、終わってみれば光栄であったと、心から感謝をさせていただいています。

初めて会った受講生のB班の10名の皆様、３泊４日と限られた中で、それぞれ気付き、学び、また人との出会いの素晴らしさを何よりも感じられたことでしょう。

カウンシルファイアの移動の道中に、暗闇の中で灯されていた６つの言葉「正義」「協力」「信頼」「忍耐」「努力」を胸に、未来に向かって頑張ってください。

B班の皆様に出会えてよかったです。４日間ありがとう!「てつ子の部屋」楽しかったです。感謝!感激!

●梶原　由展

今回は、会社からの指示だったので、初日は気持ち的には乗り気ではありませんでした。しかし、一日一日過ぎていく中で、初日のネガティブな感情がなくなっていき、自分自身の中にあり課題点をあらためて見つめ直すようになっていくように心変わりしていきました。

今回のセミナー参加で、人生の中で最年長リーダーという大役にあたり、いろいろ過ごしている中で、こうすればよかった等の改善点があり、気付かされる場面があったので、今後は発見した改善点を習慣づけていきたいと思います。

●小松　悟

僕がここに来たきっかけは、自分でいろんな人と出会って、友情を作ることでした。始まる前に、余島に来て、僕ら2680地区と2670地区と一緒になり、一つの班になって、ルールを守っていろんな交流をしました。

初日のキャビンタイムで、自分の班で親睦と語り合いをして、これまで自分がやってきた事を話しました。

2日目には八百伸弥さんの講義で、「不存在デメリット」について話をしました。八百さんの話では、野菜の消費量が多かったのはトマトだと分かりました。八百さんの話はとても良かったです。次に吉川雄介さんの「自分が変わる。世界が変わる。」の話は、ネパールについて学んで、とても良い話でした。思索の時間、余島の自然を見ながら、自分を見つめ直したりしました。余島は本当に良いところです。

レクリエーション、マシュマロとパスタを使ったマシュマロタワーをみんなで力を合わせてしました。みんな盛り上がりました。

この夜からバズセッションに突入です。テーマは「桃太郎が人間たちでは倒せなかった鬼を犬、猿、きじを使って鬼退治をあらゆる方向性から考えて、結論を結びつく」をもとに、班のみんなで役割分担をしてやりました。

3日目も、バズセッションの続きをやり、みんなで発表練習をして、僕も発表を少しやりました。フォーラムでも発表しました。楽しかったです。カウンシルファイアも楽しかったです。安行英文さんの話とても面白かったです。

最終日も講義を聞いて、それから記念撮影をしました。RYLA楽しかったです。次からはRYLA学友です。

●多田　潤平

今回このようなセミナーに参加させていただきありがとうございました。

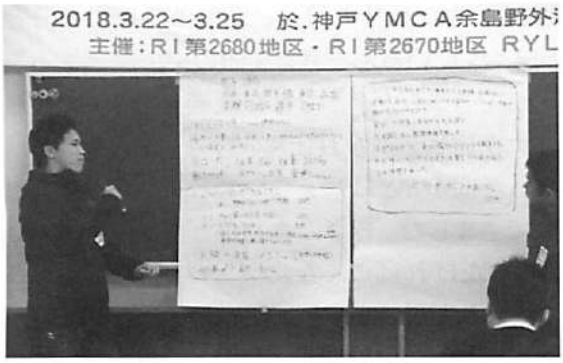
様々な講師の方々のお話を聞かせていただき、大変参考になることばかりで、今回のRYLAセミナーのテーマである「時（いま）を生きる。」ということの意味が分かった気がします。

自分がこれから何をどのように行動していかなければならないのか、その行動の先のビジョンが何なのかを考えていかなければならないと感じました。

また、この4日間で出会った人達との繋がりは大変貴重で、内容の濃い充実した時間を共に過ごせたことに喜びを感じます。この経験は一生の中で重大な核になると感じましたので、機会があればまた参加させていただきたいと思います。

●寺西　晶哉

今回RYLAセミナーに参加させていただき、学ぶもの、自分を見つめ直すことが多くあった



と思います。

今大学３回生で就活をしていて、数多くのフォーラムを聞かせていただき“思ったことを挑戦・行動するか”によって、今後が変わってくるということを知り、今後の就活に活かし、自分自身が目指す所を狙っていきたいと思います。

また、普段自分自身を見つめ直すことがない為、思索の時間で今までの自分を振り返り、これからどのようにしたらよい方向にいくのか、なぜ悪いほうに進んでしまったのかを考え、これからの生活の仕方を考える時間となりました。

普段ではできないことをさせてもらったこのRYLAセミナーに参加できたことを非常に感謝しています。さらにこのセミナーで出会い、生活を共に過ごした哲子の部屋のメンバーにも感謝しています。ありがとうございました。

●角元　勇介

今回は第40回RYLAセミナーを受講させていただきありがとうございました。主催の皆様、委員会の方々、学友会の方等、多くの人に支えられているなと感じました。時を生きるというテーマで、自分が今、置かれている現状や、世界の現状、これから起こると予想されているさまざまな問題に対して、考えさせられる良い機会となりました。社会人となり、慌ただしい生活を送る日々では、自分をしっかり見つめ直す時間がなく、また世界の問題に対して、自ら動いている方の貴重なお話を聞くことができ、今の自分ができることを通じて、何か貢献できるように行動します。

バズセッションという、新しい形式の話し合いの方法を知ることができ、自分が組織を引っ張る存在になったときに活かせるように、自分の中に落とし込みます。ロータリークラブという、世界を動かそうとする意識を持った方々の火が消えないように、引き継いでいけるように働いていきます。

●井上　克輝

まず、今回のような体験をさせていただき、ロータリーの皆様、学友会の皆様、支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

今回のこのRYLAを通じて、僕自身世界のこと、日本のこと、社会のことを全然知らないなと思いました。吉川さんの講義の中で、発展途上国で夜道をウロウロする３歳の女の子の話がありました。３歳という年で食べ物に困るということは、日本ではほとんどないことです。この問題に対して、今自分が出来ることは、今の時点では考えつきません。ですが、この世界の現状を知ること、そして生活の中で、何かその現状を解決するヒントが埋まっていないかを考えるだけでも違うと思います。

先輩の上司の話も聞いていましたが、やはり実際に来てみて、出会った人達と一緒に考え学べたことは、僕自身すごくいい経験になりました。この経験をこれからの自分の成長にいかしていきます。

●山本　逸平

国際ロータリー第2670・2680地区の第40回RYLAセミナーでした。会場は香川県にある余島でした。

大学４年生の時にローターアクトに入り、毎年行こうと思っていましたが行けず、やっと参加することができました。今回初めての参加だったので、４日間何をするのかわからず、緊張していましたが、班のメンバーやカウンセラーの方々が積極的な方が多かったので、溶け込めました。

1日目は開講式とパーティーがありおいしい料理をたくさんいただきました。2日目は講義で2人の方にしていただきました。同じようなセミナーを何度か受けたことがありましたが、また考えること、新たな発見があり、とても勉強になりました。レクリエーションでは、パスタのタワーを協力して作りました。3日目からのバズセッションでは、チームで考えて1つのものを完成させ、より班の交流が深まりました。同世代の方にもっとRYLAセミナーを受けてほしいと思いました。

●フィオナ・チタ・ディウィー

私はインドネシアの出身で、こんなセミナーに参加させていただいて、本当に感謝している。42人ですが、4つのグループに分けて、私はB班に入ると聞いた時、緊張していた。みんなとうまく交流できるかどうかを心配した。10人のB班と会ったことはないですが、最初から最後までなかよくして、3泊4日ずっと一緒に食事して、ものごとを学んで、入浴して、ワイワイして、寝ることが、カウンセラーとの関係も深く感じている。

今日で最後ですが、これからもみんなと縁を結びつづけたい。B班だけでなく、今日のみなさまとまたいつか会おう。その時まで、この思い出は宝物として預かる。

●江田　万結子

まず初めに、この貴重で素晴らしい体験をさせていただいたことに本当に感謝いたしております。学友の先輩方に以前からお話を聞いていましたが、想像以上に楽しく学びの多い4日間になりました。

私は現在大学生ですが、来月からは社会人として企業に就職します。不安やこれからどのような人生を送りたいかなど、頭の中では考えたいことがたくさんありましたが、普段の生活ではなかなかしっかり考える時間を取れずにいました。そんな中、このセミナーで講師の方々の刺激的なお話の後に、思索の時間で自分と向き合い、いろんな考えを頭の中で整理することができました。とても有意義な1時間でした。

カウンセラーのお2人を含め、班の方々とは会ったばかりとは思えない程、仲を深めることができました。皆さんありがとうございました。B班でなければこんなに楽しい4日間にはならなかったと思います！

●曽我　真衣

今回初めてRYLAセミナーに参加して、初めは不安で、知らない人と関わることがしんどいと思っていたのですが、B班のメンバーたちに出会えて、とても自然に仲間になれて、とても楽しく、うれしかったです。

たくさんの講義や、グループでのディスカッションをして、自分の意見とまわりの意見の多様性を、まず受け入れることの大切さが勉強になりました。

自分が変わったかどうかはまったくわかりませんが、変わるきっかけや、変わろうと思えるきっかけになったので、興味深い3泊4日でした。

住んでいる場所も年齢も職業もバラバラな人たちと、こんなに深く関わり合うことがなかったので、自分のこれからの人との関わり方を変えていこうと思うことができました。

セミナーで感じたことを忘れないよう、自分の日常にいかしていきたいです。

■■■ C班 ■■■

●カウンセラー　高橋　亮次

昨年に続き2回目のRYLAカウンセラー。期待と不安を抱えながらキャビンにて自己紹介。それぞれの表情、温度を察しながらスタートしました。キャビンタイムではコミュニケーションが取れた感はあったものの、やはり初日、まだまだ本音や本心は探り探りだったと思います。

一番班の距離がぐっと近づいたのはレクリエーションでした。前日は控えめだった子が中心となったり、各々の役割分担が自然発生していく様子を見てホッとしました。

C班の特徴は、皆で話し合いながら高い目標を持つこと。少し無茶もあるけれど、とにかくできる方法論を積み上げていくこと。班が1つにまとまった時の爆発力は、隣でいながら頼もしい限りでした。

バズでの話し合いでは、話の論点がまとまらない、ふざける、意見者の偏り等、出口が見えない時間があったけれど、一旦仕切り直しの提案者が現れ、休憩後には、それぞれが見つめ直し、再スタートが切れた時は、自分たち自身で切り開いていく、班としての成長を嬉しく思いました。

発表内容に関しては、少し考えましたが、皆で議論した結果だったこと、内容よりも課程を優先し、発表機会の少ない子の意見を引き出せるよう配慮しました。フォーラムの是非はともかく、C班として全員が作り上げた作品は誇らしく思います。

最後のキャビンタイムでは、さらに深い話になりました。フォーラム内容も含め、在り方、ロータリアンに対しての意見等、3時まで話し合った中で、出てきた内容を考察すると、もう少し違った可能性もあったのかもしれません。皆の可能性の幅を縮めるも拡げるも、自身の在り方、信頼したうえで、行動次第では違った時間も過ごせたのかも。

とにかく4日間、自分たちを見つめ、変化に対応し、成長していったみんなと同じ班だったことに感謝でいっぱいです。それと同時に、私自身も次の成長のために、もう一度見つめ直したいと思います。

今回RYLAに携わってくれた皆さん、ありがとうございました。

●カウンセラー　徳梅　陽子

満天の星、夜のさざ波、海からの日の出、三日月、エンジェルロードと自然あふれる余島で開かれた第40回RYLAセミナーに、初めてカウンセラーとして参加させていただきました。

一人一人バラバラに集まった皆さんが、否応なしに班分けされ、オープニングパーティー、キャビンタイム、レクリエーション、フォーラムを通して、関係を深め、率直に意見交換し、家族のようなこの出会いを、これからも大切にしてほしいです。

レクリエーションを見守りながら、ハラハラドキドキ、バズセッションでの皆のいろいろな意見、あえてのこだわりなど好きでした。

カウンセラーとして何も出来なかった自分を反省して、成長していきたいです。パートナーの支えもあり、何とか4日間を終えることが出来ました。ありがとうございました。

●都志　育生

今回RYLAセミナーに参加して、長い時間に思いましたが、実際は短くて充実した時間を過ごせました。高いレベルでの講義と、自分を見つめ直す時間と、年齢も職業も違う中で一つのテーマに対して話し合いがありました。

講義では、ためになるお話と、リーダーとしての考え方や組織の中の役割等を学びました。

2日目の講師の2人は、私と年齢が変わらないのに、起業したり世界に行ったり、身近にないことですごいと思い、感動しました。自分に何ができるのかと思いました。

自分を見つめ直す時間では、自分を好きになり、どうしていきたいのかと考える時間となりました。

一つのテーマの討論では、年齢、職種の違う中で、いろんな考え方、見る角度の違いがあり、とても参考になり、考えもあるのだと、多方面から考えるようになりたいと思いました。C班の仲間は素敵で、楽しく過ごせました。カウンセラーもよく楽しい時間でした。

●石田　将之

今回RYLAセミナーを受講し、感じたことは、全て一人の力では物事を完成できない、一つのものを作り上げていくには、グループを良い方向に導く、その中で、リーダーシップの重要性が一番大事なことだと改めて感じました。

セミナーでの講義では、リーダーシップとは何なのかということを学び、どのようなリーダーが良いのか、リーダーに求めるものを、講師の先生方の経験から学びました。

グループワークでは、パスタとマシュマロ、はさみ等を用いて、できるだけ高く積み上げるという目標で、チームが一つになり、目標に向かって議論した結果、4チーム中2位でしたが、高く、倒れないものが作れたという意味では1位だと思います。何個も案が出て、議論し、共有し、良いものを作り上げる。目標というゴールまで長かったですが、チームメイトは目標にブレることなく行動できたと思います。

バズセッションでは、答えがないものの結論を発表するということで、様々な意見が出ましたが、軸を崩さずに結論へとチームで導くことが出来たと思います。

リーダーシップとは、まず自分のことをリードできないと、グループのメンバー、他の人をリードできないと感じました。

今回のセミナーで、リーダーシップについて学んだことを、今後の生活で活かしたいと思います。

●足立　拓也

今回のRYLAセミナーに参加して、毎日がとても有意義な日々だったなと思いました。

初日は、日常と全く違った環境や、年齢、性別、育った文化や環境が違った人たちと、何をさせられるのかわからないまま、とても不安でしたが、その環境ゆえに出される意見などに、新しい発見をたびたび感じました。

3泊4日という時間を共に過ごした班のメンバーやカウンセラーとの友情・団結力・絆をこれからも大切にしたいです。

また、これからの人生の中で、この研修と同じように、多様な人々と一つの問題にぶつかることも多々あると思いますが、今回の経験をいかし、様々な道から一つのゴール、目標を導き出し、乗り越えていきたいと思います。

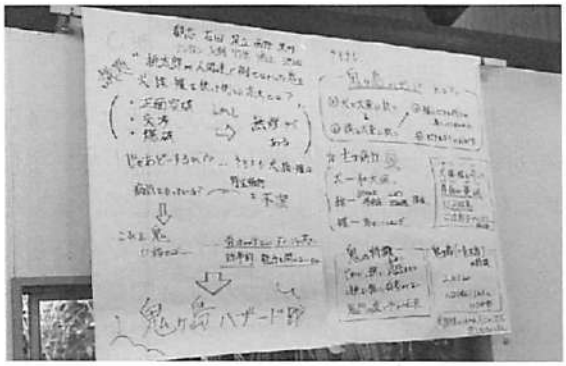
今回はこのような素敵な研修に参加させていただき、また企画していただきありがとうございました。

●西野　通修

今回、RYLAセミナーの4日間を通じて、私が感じたことを書いていきます。

黒田氏の講義は、ロータリーやRYLAの歴史に触れ、その理念に感銘を受け、八百氏、吉川氏の講義は、理念を仕事にする、チャレンジすることの重要性に気付かされました。仕事、プライベートを問わず実践し、行動していくことで、自分自身が変われるように意識し、成長していきます。特に八百氏の話は、私の実家がトマト農家ということもあり、とても興味深かったです。

そして、C班で出会った仲間達は、私が普通に生活していれば出会える人達ではなく、議論を通じて、その考え方、生き方に触れられたことは、私にとって大きな財産になりました。この4日間で得たものは多く、自分の中で整理するには時間がかかるかもしれませんが、必ず自分を成長させる宝となると確信しています。



●黒川　侑治

今回のRYLAセミナーを通して、初日はどのような人が来るか、どのような内容なのか未知数で、不安だらけでした。他人ばかりでうまくやっていけるだろうか、想像もつきませんでしたが、結果的に3泊4日を楽しく過ごせて、最高の研修だったといえます。

研修を通じて、他人との考えの違いもあり、チームとしてどうまとまっていくかの達成感、互いの意見を尊重し合い、集中するときは集中し、息つくときはバカやったりと、協調性についても、かけがえのない経験だったといえます。「リーダーとは」を考える内容であり、何を持ち帰れるのだろうかと思索する中、班の討論中に、自分の考えを言葉にまとめて、いかに相手に伝えるかの難しさ、流れや雰囲気を読み取って、どう進行していくかなど、自分に足りないものの発見もありました。自分自身を見つめ直す、振り返るという貴重な時間もいただけたわけですので、これからの自分の方針、在り方について考えていきます。

●池田　健悟

最初余島に来たときは、こんなところで4日、初対面の人と過ごすのかと正直困惑していました。C班で私は最年少として活動していましたが、みんな接しやすくて、年は離れていても共通の話題で盛り上がれて、バカ話で騒げて、みんなとの会話は本当に楽しかったです。

レクでのパスタタワーの時も、「鬼が島ハザード」の時も、傍から見たら、「こいつらバカじゃないか」と言われそうなことに、本気で熱く話し合いできる最高な班でした。

講義では、今まで私が見たことのない世界を見せてくれる内容は、大学での1つの授業より価値のある、私の今後に参考になるものでした。

このRYLAに、正直最初は乗り気じゃなかったし、行きたくないと思っていたことも事実です。ですが、それぞれ個性豊かな、考え方も違うメンバーと出会えて、RYLAに参加できて良かったなと今では思います。このセミナーを今後にいかすかは自分次第ですが、間違いなく有意義な3泊4日でした。

●Gombojav Nandintsetseg

3泊4日、余島の良い自然で、RYLAセミナーに参加したことは、私にとって自分がやっていることや、自分自身について思索する良い機会となりました。最初、余島に来るときは、どんな人達と同じ班になるのか、みんなと意見が合わなかったらどうしよう、などの心配がありましたが、この4日間ですばらしい仲間達ができてとてもうれしいです。

また、私はいつも自分のことを他人と比べてしまう悪いくせがありましたが、このセミナーを通じて、自分のことを他人と比べて、私はこれをできていないとか、よけいなことを気にせず、自分のできることを、もっと輝いていくのが良いことだと気づきました。

●入潮　有紀子

セミナーに参加する意味とは・・・?

RYLAに参加するにあたり、早く帰りたい、どうして4日間も、と思っていました。正直なところ、今でもその気持ちは変わりません。春から新卒である私は、学生として長い休みを謳歌できるのは、あと1週間程しかないからです。やりたかったこともありました。泣く泣く断った誘いもありました。しかし、参加は今まで世話をしていただいた父の望みでしたし、恩返しの意味も込めて参加しました。

結果はどうだったでしょうか。何よりも趣味を大切に生きてきた私にとって、それを4日間も捨て参加したこのセミナーが、有意義だったか今は分かりません。しかし、このセミナーを通して、共に生活したC班の人達と交わした議論や、やり取りは、私の今までの生活にはない意見ばかりでした。気づいたことも教わったことも沢山ありました。この経験を今後の自身にいかし、後悔しないものにしたいと思います。

●竹原　悠希

このセミナーを通して、多くのことに気付き、また、学ばせていただきました。講義では新しい視点で物事を考える機会をいただきました。レクリエーションやバズセッションでは、C班全員で協力し、楽しみながら、課題に取り組みました。自分と違う考えを理解することや、自分の考えを伝えることは難しいと改めて思いました。キャビンタイムでは、初めて会った方々と親睦を深めました。不安でしたが、楽しく温か

い班員に囲まれて、とても幸せでした。最後のキャビンタイムでは、寝るのが惜しいくらいでした。みんな大好きです。

このような体験ができたのも、この余島の大自然があったからだと思います。離島で正直不便なことも多くありましたが、新鮮だったと思います。

このセミナーに関わってくれた方々に感謝の気持ちを忘れず、これからも生活したいと思います。

●鴻上　歩美

職場で「研修にいってみん?」と言われ、内容もよく分からないまま断る理由もなく、学びたい、成長したい、という思いだけで参加することになりました。周りに付いて行けるか、まず一人で余島に行くことができるのか、不安な気持ちのまま参加しました。

1日目は楽しみ半分、不安半分でしたが、徐々にいろんな人といろんな話をするのが楽しくなり、日に日に楽しいな、参加してよかったなと思うようになりました。

思索の時間やカウンシルファイアでは、久しぶりにゆっくり自分を見つめ直すことができ、自然の中でリラックスすることができました。

今回の学びや出会いをしっかり今後に活かしていくことができるようにしたいです。4日間ありがとうございました。

■■■ D班 ■■■

●カウンセラー　荒木　健作

プレカウンセラーミーティングを経て、このRYLAセミナー初日を迎えた。カウンセラーとして初めての経験なのに、きっちりと予習せず、ただただ不安な気持ちで・・・。唯一、事前に決めていたことは、受講生に対して、決して指導、指示はしない、全てを彼らの判断にゆだねるということでした。具体的な指示などなしに、組織を目的の場所に導くなんて経験はしたことはないし、これまた本当にできるのか?正にRYLAカウンセラーは、私にとって大きな挑戦でした。経験豊富な阿部真弓さんとタッグを組み、11名の個性豊かな受講生たちと3泊4日を過ごし、発見したことは、組織が目標、目的を達成するために、リーダーが中心となって絆を深め、意識を高めることが大切。さらに、静かにメンバーの言動を理解し、背中をそっと押し上げる人の存在のメリットでした。

●カウンセラー　阿部　真弓

今回も無事RYLA（第40回）が終了いたしました。RYLAは不思議なセミナーです。班のファミリーのみんなの向いている方向が、いつの間にか一緒になっている。たった3泊4日で・・・。こんな貴重な経験はなかなかできるものではありません。

プログラムが経過する毎に、班の雰囲気が変化している。受講生・カウンセラー・RYLAセミナーに関わるロータリアンの方々が、同じ方向を向いてしまうRYLAプログラムに神秘さを感じます。

「人と出会い　神と交わり　愛の火の　燃えるところ」

今回も素敵な出会いをし、一緒に交わり、時間を共有しました。感謝しております。このままずっと、この出会いを大切にしていきましょうね。本当にありがとうございました。またお会いしましょう。

●詫摩　健太

"Respect"

3泊4日のセミナーに参加させていただき、プログラムの内容の濃さから、毎日が非常に充実し、ワクワクする気持ちで臨めました。

レクリエーション、バズセッションでは、様々な個性を持つ優秀な班の仲間と、有意義な時間を過ごすことができました。

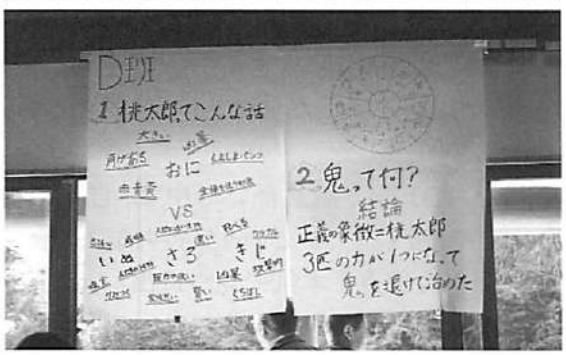
今回のセミナーを通じ、私自身改めて、時間の使い方に対して考え直すことができました。それは講師の先生方のお話で気付き、思索の時間で自分を見つめ、問うた時に思いました。これからの人生、限られた時間をどのように活用するかを常に意識し、今後の実生活に取り入れたいです。

最後に、私を推薦してくださった姫路南ロータリークラブ、四国・兵庫地区のロータリークラブ、RYLA学友会、そして40年以上の長きにわたり、RYLAセミナーの歴史を築かれた先輩方に、心から感謝を申し上げます。

●福井　文

今回のRYLAセミナー、そもそもの参加のきっかけは父からの勧めでした。こういった合宿は、学生以来、3年以上前になるので、良いきっかけになると思いつつ、26歳でこういったことに参加するのも、実は勇気がいりました。

結論から言えば、新しい学びや改めて気づいたことが多かったです。例えば、ボランティアについて、私は教育関係の仕事についており、高校生等、自分より若い人たちに対して話すことがあります。そういった仕事をしていると、なんでしっかり話を聞いてくれないのだ、とか、どこまで理解してくれているだろうか、と目に見える結果を求めがちです。せっかく話しているのだから、一つでも教えてあげたいという気持ちは、ある意味押し付けになってしまうのではないかと、ボランティアと見返りを求めないことや、信と信頼の話を聞きつつ、改めて考えました。人に対して何かをするとき、自分の中の理想のみを求めるのではなく、何か一つでも相手にとってうれしい、役立つことがあったら、それで十分ではないかと学んだ研修会でした。



●北野　龍治

3月22日㈭から3月25日㈰までの3泊4日のセミナーで、初めは厳粛な雰囲気であると思っていたのですが、実際始まってしまうと、そういった雰囲気ではなく、1日1日を楽しく学ぶことができました。班のメンバーは、年齢はもちろん、出身地も違い、共通の話題を探りながら始まったセミナーも、カウンセラー2人のやわらかな雰囲気で和み、バズセッションといった班のメンバーで行う討論会も、冗談を交えながらも、時にはマジメに話し合うことができ、フォーラムの時はとても良いものになったと思います。

今回、このセミナーに参加させてもらって、

今後自分にどのように影響が出て、どのように変化するかは、今はまだわかりませんが、この3泊4日という短い時間ではあったものの、とても濃く深い時を、今回のメンバーと過ごせたことは、自分にとってとても大きく、想い出以上の何かがあったのではないかと思います。

●中垣　匠人

私はこのRYLAセミナーで、本当に信頼できる仲間に出会うことができました。また、今まで自分のことが嫌いな気持ちが、前向きになったように感じました。

私たちD班は、話し合いの中で、自分の持つ弱点や、変わりたいという気持ちを語り合い、良い所や改善点を本気で見つけ出し、お互いを高めあうことができました。自分の弱い点や、悪いと思う点を見せることで、裏も表も知り、正面から全力で受け止めてくれる良い仲間になることができました。今まで、ここまで自分に対して正直に、正面から見てくれる人に出会ったことがありませんでした。ここで出会った仲間は、一生の宝だと心の底から思います。そんな仲間達に出会えたことで、自分自身にできること、良いところを見つけることができ、今までよりも自分自身のことが好きになりました。今回のセミナーで手に入れたこの気持ちを、今後の生活や将来の夢に向けて頑張っていこうと思います。このセミナーに来て本当に良かったです。

●鴻上　大輔

今回のセミナーで印象に残ったことは2つあります。1つ目は、八百講師の講義に出てきた「不存在デメリット」です。その組織にとって居ないと困る存在のことでした。私は現在、会社組織の一員ですが、居ないと困る先輩社員を目にしています。その人の話を聞くと、かなり苦労してきた経験と知識、そして、今後何をしていくのかを考えていました。私もそのように仕事に向き合っていきたいと思いました。

2つ目は、集団における協調性の大切さです。初めて顔を合わせた人と、いくつもの体験をする中で、難しい課題であっても、全員の力が1つになれば、答えを導き出すことができると感じました。今回のように、集団で泊まりがけの研修をするのは初めてでしたが、協力することの大切さを、身にしみて感じました。明日からの社会人生活でも、協力することを大切にしたいと思います。

●中山　光

このRYLAセミナーは、私の1年365日のうちの4日間に過ぎないものでありましたが、その有意義さ、濃厚さは、これからするだろう人生経験、過去の人生経験を見渡しても、他の追随を許さないし存在となりました。

私の所属したD班のメンバーは、1人1人が素晴らしい輝きを秘めた人達であったということが、私にとって一番の喜びでありました。彼らと行った行動の数は、文章に表しきれないものであり、それぞれの輝きが私を照らし、またお互いを照らし合い、それぞれの成長に繋がったと確信しています。

最後に、この不思議な、かつ必然ともいえるこの出会いを喜ぶとともに、このような場を設けてくださったロータリーの関係者の皆様、D班を見守ってくださったカウンセラーの2人、そしてD班のメンバー、全ての人々に深い感謝を思う次第であります。

●友　拓海

私は今回のセミナーを受けるにあたって、不安だとか話せるだろうかとか考えて、余島にきました。実際はみんな優しくて、すごい話しやすくて、すぐに打ち解けることができて良かったなと思ったのが、一番初めに自分が思ったことです。

講義やバズセッションをしていて感じたことは、1人1人の個性的な面は違うのに、最終的に行きつく答えは一緒なんだと感じました。また、最終日前日の夜には、お酒の力も借りながら、それぞれの良さを本音で語り合えたことに、充実した濃いセミナーだったのではないかと思いました。

今回のセミナーで、自分が変わったことは、広い意見を柔軟的に取り入れられるようになったのではないかと思いました。普段の私生活や仕事では感じられることのないことを感じることができて、本当に良かったと思いました。

●洲上　理恵

私はYMCAの中高キャンプに来て以来、17年ぶりに余島を訪れました。ずっと来たいと思っていた余島に、私はまさに引き寄せられるように来ることができました。半年前までは考えも及ばなかったことが、私に次々と起きています。しかし、それはずっと私が信じ続けてきたことなのです。20代はそれを信じることはおろか、本質が何であるかを、本当に暗中模索し続け、絶望に見舞われることも少なくありませんでした。しかし、30代が近づくにつれ、本当に自分の大切なものが、確信に変わってきたと実感しています。それは信じることや、愛情を循環させて生活をすること、他己的に働くこと、自分に正直でいること、いつ何時も素敵なことを探し求めること、周囲を幸せにするように自分があること等、自分と自然と人と、すべてにおいての根底にあるものです。それが正しいか、そのまま信じてよいのか、いつも考えていますが、神様は、信じられなくなると必ず応援してくれることを与えてくれます。このRYLAセミナーがまさにそうでした。人との関わりで、いつも「果たして、これが本当に求め続けていい考えなのだろうか。」と分からなくなりますが、この3泊4日のセミナーを通して、その考えが尊いものであり、それが周囲に良い働きとなると信じることができました。書ききることのできない思いや、もっとできたこと、たくさんの想いを感じています。

共に学び、過ごすことができた仲間、スタッフの皆様、大自然余島に心から感謝しています。

●松尾　麻紗子

3泊4日があっという間に過ぎていきました。このD班でRYLAセミナーを一緒に受けられたことが、本当に楽しく、素晴らしい経験になりました。初めは、キャビンタイムやバズセッション、フォーラムと聞き慣れない言葉がたくさんあって、どんなことをするんだろうと不安に思ったけれど、このD班のみんなとだから、どんなことも楽しく、意味あるものにできたと感じました。班のみんなと夜通し話し合ったり、人の話を聞いていると、自分でも気づけなかった自分の部分がわかってきて、「私って人にはこう思われ

ているんだ。」と自分を客観視することもできました。

RYLAセミナーに携わった方々、D班のカウンセラーの健さん、真弓先生、D班のみんなに感謝したいです。

●DY ZYRA MAE NODADO

このようなセミナーに参加するのは初めてだったので、正直、最初は他の人と仲良くなれるかなという不安でいっぱいでした。しかし、初日からD班のメンバーたちはすぐ仲良くなり、とても楽しかったです。様々なアクティビティに参加して、皆の意見はかみ合わなかったエピソードもありましたが、最後1つに、力になって、チームワークの良さはすごく感じました。D班のメンバーは恵まれているなと、とても実感しました。

私の中で一番思い出となったのは、毎晩のキャビンタイムです。全く知らない人と、こんなに仲良くなれると思ってなかったし、さらに、こんなに面白い話ができると思ってなかったです。

別れは悲しいのですが、本当にこのセミナーに参加してよかったなと心から思っています。このセミナーを是非他に人に勧めたいと思っています。

I really had an amazing time! Group D is the best.

●清水　亜実

RYLAセミナーに3泊4日参加して、今までの自分の考え方や生き方を見つめ直すことができ、とても楽しかったです。普段は滅多にしないような難しい話を、班の皆で話し合いをし、各々の素敵な意見をまとめ、発表するバズセッション、フォーラムは本当に貴重な経験になりました。2日目のレクリエーションでの、パスタの塔づくりでも、仲間で考えて実行する大切さを学びました。人の意見を素直に聞き入れ、認めることは、本当に不可欠なことなのだと知ることができ、人間的にもとても成長できたのではないかと思います。

3泊4日という短い期間でしたが、様々な人と関わることができ、自然にも触れることができ、本当に充実したセミナーでした。また機会があれば、班の皆にも会いたいし、カウンセラーのお二人ともまたお話ししたいです。人生でとても貴重な体験になりました。ありがとうございました。

おもいで

THE
NINTH
APOLLO

RYLA 第40回RYLAセミナー
2018.3.22~3.25　於.神戸ＹＭＣＡ余島野外活動センター
主催：RI第2680地区・RI第2670地区 RYLA委員会

2018.3.22~3.25　於.神戸ＹＭＣＡ余島野外活動センター
主催：RI第2680地区・RI第2670地区 RYLA委員会

RYLA 第40回RYLAセミナー
2018.3.22~3.25　於.神戸ＹＭＣＡ余島野外活動センター
主催：RI第2680地区・RI第2670地区 RYLA委員会

第40回RYLAセミナー

■　フォーラム

■ フォーラム

■ 閉講式

■ 閉講式　2670地区GN挨拶

■ 閉講式　2680地区G挨拶

■ カウンセラー

受講生名簿

2670地区

NO.	氏　名	性別	推薦RC	班	勤務先・在籍校
1	林　　翼	男	高知東	A	東海東京証券㈱
2	松本慎太郎	男	徳島プリンス		㈱迅翔興業
3	野口　優也	男	松山西		松山大学
4	村上　寿里	女	今治南		今治明徳中学校
5	角元　勇介	男	鴨　島	B	徳島銀行
6	井上　克輝	男	高知中央		㈱城西館
7	山本　逸平	男	松　山		松山大学
8	曽我　真衣	女	東　予		住友生命保険相互会社
9	西野　通修	男	高知東	C	㈱酒井建設
10	黒川　侑治	男	小豆島		㈲真里
11	池田　健悟	男	道　後		松山大学
12	鴻上　歩実	女	新居浜		新居浜市役所
13	鴻上　大輔	男	新居浜	D	桑原運輸㈱
14	中山　　光	男	徳島プリンス		種智院大学
15	友　　拓海	男	高知南		㈱垣内
16	清水　亜実	女	道　後		松山大学

●カウンセラー　A班　野村　栄一　(高知中央RC)
B班　町田　哲子　(阿南中央RC)
C班　高橋　亮次　(高松北RC)
D班　阿部　真弓　(今治RC)

2680地区

NO.	氏　名	性別	推薦RC	班	勤務先・在籍校
1	三木　悠嗣	男	姫路東	A	三木産業㈱
2	西本　　秀	男	三　木		㈲すえひろ薬局
3	三嶋　明宏	男	神戸須磨		神戸芸術工科大学
4	重里　匡哉	男	明石北		カネキ水産㈱
5	森崎瑠斐子	女	洲　本		洲本伊月病院
6	杉岡　千佳	女	加古川中央		兵庫大学
7	廣瀬　由佳	女	神戸西神		新見公立大学
8	梶原　由展	男	姫路東	B	㈱ヒメプラ
9	小松　　悟	男	柏　原		㈱ダイヤ製薬
10	多田　潤平	男	川　西		㈱ダスキン川西
11	寺西　晶哉	男	加古川中央		兵庫大学
12	Fiona Citra Dewi	女	神　戸		小倉サンダイン㈱
13	江田万結子	女	伊　丹		関西学院大学
14	都志　育夫	男	津　名	C	社会福祉法人千鳥会 特別養護老人ホームゆうらぎ
15	石田　将之	男	姫路東		㈱ヒメプラ
16	足立　拓也	男	柏　原		㈱やながわ
17	Gombojav Nandintsetseg	女	神戸須磨		㈱神戸製鋼所
18	入潮有紀子	女	伊　丹		関西大学
19	竹原　悠希	女	加古川中央		兵庫大学
20	託摩　健太	男	姫路南	D	姫路市役所
21	福井　　文	男	神　戸		大手前学園 大手前大学アドミッションズオフィス
22	北野　龍治	男	篠　山		㈱大市住宅産業
23	中垣　匠人	男	三　田		京都造形芸術大学
24	洲上　理恵	女	西宮イブニング		社会福祉法人光朔会　オリンピア岩屋
25	松尾麻紗子	女	西宮恵美寿		兵庫医科大学
26	DY ZYRA MAE NODADO	女	加古川中央		兵庫大学

●カウンセラー　A班　冨田　裕子　(相生RC)
B班　畑中　伸介　(三木RC)
C班　徳梅　陽子
D班　荒木　健作　(川西RC)

第40回RYLA委員会

■ガバナー

柳澤　光秋　(第2670地区　高知東RC)
瀧川　好庸　(第2680地区　神戸西RC)

■顧問

今井　正信　(第2670地区　観音寺RC)
佐々木善教　(第2670地区　松山北RC)
前田　直俊　(第2670地区　坂出東RC)
深川　純一　(第2680地区　伊丹RC)
安平　和彦　(第2680地区　姫路RC)
三木　　明　(第2680地区　姫路RC)
丸尾　研一　(第2680地区　神戸西神RC)
滝澤　功治　(第2680地区　神戸須磨RC)

●青少年奉仕委員会委員長

委員長
古川　　充　(第2670地区　脇町RC)
坂東　隆弘　(第2680地区　柏原RC)

副委員長
三木　健義　(第2680地区　姫路RC)
黒田　建一　(第2680地区　西宮イブニングRC)

■　RYLAスタッフのみなさん

●RYLA委員会

(第2670地区)

委員長　米山　徹太　(松山RC)
副委員長　藤原　賢治　(徳島プリンスRC)
委　員　阿部　真弓　(今治RC)
篠原　成行　(北条RC)
猪野恵一郎　(松山南RC)
深見　邦芳　(松山RC)
大政　裕志　(伊予RC)
森　　廣一　(美馬RC)
遠藤　公信　(美馬RC)
渡辺　昌明　(高松北RC)
野村　栄一　(高知中央RC)
森田　康子　(高知東RC)
カウンセラー　髙橋　亮次　(高松北RC)
野村　栄一　(高知中央RC)
町田　哲子　(阿南中央RC)
阿部　真弓　(今治RC)
JAPANRYLAカウンセラー
荻田　智子　(高松北RC)

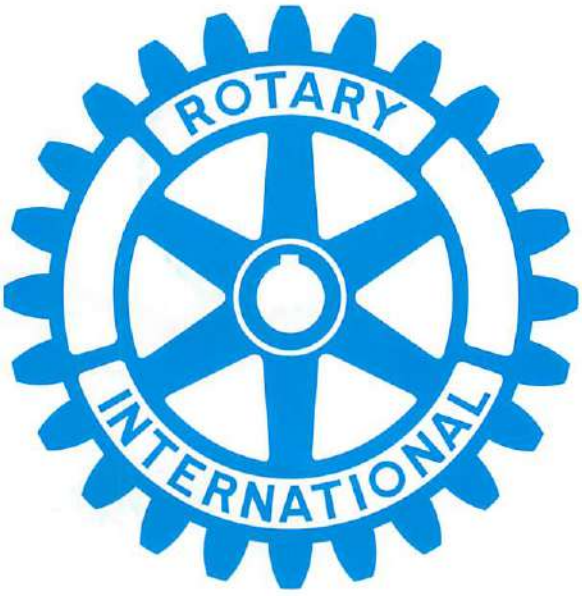
(第2680地区)

委員長　白井　良夫　(伊丹RC)
副委員長　北川　博崇　(川西RC)
委　員　荒木　健作　(川西RC)
原田　仁史　(神戸垂水RC)
畑中　伸介　(三木RC)
伊藤　幸美　(神戸西神RC)
加藤　　拓　(伊丹RC)
圓尾　美佳　(龍野RC)
永松　潔和　(神戸RC)
奥田　　裕　(神戸モーニングRC)
大森　英夫　(伊丹RC)
佐藤　栄一　(伊丹RC)
田中　賢一　(伊丹RC)
徳梅　明彦　(あわじ中央RC)
冨田　裕子　(相生RC)
土田　光一　(柏原RC)
安行　英文　(三田RC)
横田　勝好　(姫路南RC)
カウンセラー　畑中　伸介　(三木RC)
荒木　健作　(川西RC)
冨田　裕子　(相生RC)
徳梅　陽子
JAPANRYLAカウンセラー
吉岡喜久子
永田　恵子

●RYLA学友会代表

第2670地区　大道　龍治
第2680地区　倉本　　勉

本ディスクはDVD+R DLです。古いDVDプレーヤーなど一部の再生機器では本ディスクの規格に
未対応の場合があります。未対応の場合、機器の不備により故障・破損の恐れがありますので、取扱
説明書などで確認してから使用してください。



国際ロータリー第2670地区ガバナー事務所

〒780-0821
高知県高知市桜井町1-2-16
TEL 088-856-6628　FAX 088-856-6629
Mail : rid2670gov@orion.ocn.ne.jp

国際ロータリー第2680地区ガバナー事務所

〒651-0084
兵庫県神戸市中央区磯辺通4-2-12
兵庫トヨタ本社ビル6F
TEL 078-271-2680　FAX 078-271-2681
Mail : takikawa2680@cap.ocn.ne.jp